東京帝國大學圖書之印

Ni215/811

和歌集遠鏡 下卷

本居宣長著

山崎美成大人校正

明治二十年

万葉にハ男女の相思ふとのみならず親子兄弟朋友の相思ふをよめるにもともに相思と題して部を分てり戀と云て男女の中のみの歌とするハこの集がはじめなり

頭書 古今和歌集遠鏡卷之十一

戀歌一

題しらず　　よみ人しらず

時鳥なくやさつきのあやめ草あやめもしらぬ戀もする哉

○上ドノヤウナワケナ物ヤラマダシラズニワシイマア。ムチヤナ戀チスルナカナ

大方ハおもひのひと入にとりなしてよめるをこれハ歌にむかへていへハ日にとりなして云ならん

素性法師

音にのみきくの白露よるハおきてひるハ思ひにあへずけぬべし

○音ニキクバカリデ[の白露]マダ見タコトモナイ人ヲ思フテ。夜ヱハチラレテバオキテ居テ。晝ハ又戀シサニエコタヘイデ。消サウニ思ハル、

紀貫之

ひをりの日とは騎射の日の事なり

あやなくは　わけもなく差別もなしなど云におなじ

○ヨノ中ト云モノハマアカウシタフヂヤワイ。マア聞テ下サレ。因マダ一目モ見タフモナイ人モ。此ノヤウニ戀シイヂヤワイ

右近のうまばのひをりの日むかひにたてたりける車の下すだれより女のかほのほのかに見えければよみてつかはしける　在原なりひらの朝臣

ひをりといふ名ハ。袖中抄の説のごとくなるべし

見ずもあらず見もせぬ人の戀しくハあやなくけふやながめくらさん

○見ヌデモナシ見タデモナイ人カ此ヤウニ戀シイヂヤガコレデハワケモナイフニ今日ハ一日シンキニ思フテクラスデアラウス

ろへし　よみ人しらず

しるしらぬ何かあやなく分ていはん思ひのみこころしる

春日野ノ祭ハ延喜式に春二月冬十二月共に上ノ申ノ日祭レ是とあり

上の句は序なり

べなりけれ

○見タノ見ヌノト人カラハ何ンノイハウフヂ。ソレヤワケモナイフヂヤ。戀ト云モノハ。思ヒバッカリコソハ。イツヅハアハレルシルヘナレ。其外ノフハナニモドウコウト云フハナイワイナ

かすがのまつりよまかれりける時に物見よ出たりける女のもとに家をたづねてつゝはしける　みぶのたゞみね

春日野の雪間を分ておひ出くる草のはつかに見えし君ハも

○春日野ノ雪ノアヒダカラ。ハエデヽシル草ノチットバカリ見エシメタヤウニハッ〳〵ニナヨット見エタ御方ワイノマア

人の花つみしける所にまかりてうこなりける人のもとに後によみてつかはしける

上ははやくといはん序なり

よし野川岩浪たかくゆく水のはやくぞ人をおもひろめてし

○アノ人ヲオレヤトウカラ思ヒソメタ。又オレガアノ人ヲ思フノハサイショカラモウ。吉野川ノ早瀬ノヤウニヤルセモナウ思フ。千秋云、後ハ歸の意は「たきつ心を」せきかねつる「たきつせの中にもよどはありてふを云ふなどの意なり。

藤原勝臣

音羽山ハ逢坂の西南につゞきて関より西は山科なり

あら涙のあとなき方に行舟も風ぞたよりのあるべなりける

○涙ノ上ノ。人ノトホッタ跡モナイ方ヘイク舟デモ。風ト云フ物ガ手ヨリノ案内者ヂヤ。ソレニウシガ戀ハソンナ風ノヤウナ。タヨリニセウ物サヘナイワイノ。餘材。打聞。ともにわろし。例をもてしるべし。

在原元方

立かへりとは涙によせていへり人に心をおくとはその想人の上に心を思ひおくことなり

音羽山おとに聞つゝあふ坂の關のこなたに年をふるかな

○音羽山ハ逢坂ノ關ノコチラニアル山ヂヤガ。其山ノ名ノトホリニコナタデ音デハキヽナガラ。關ガアッテコエラレヌバ。コナラニナット。トマッテ居ルヤウニ逢坂ト云フ名ノヤウニ思フ人ニ逢フモエセズニ。何ン年モタテルノカナ。サテモ早ウ逢ヒタイ

立かへりあはれとぞ思ふよそにても人に心をおきつるら波

○此ヤウニヨソニハナレテ居テモ。心ハサヤウヂウ。カノ人ノ所ヘバッカリイテ居レバ白波又シテモ〳〵アヽハレ逢タイナヤト思フ

打聞いとわろし

つらゆき

世の中はかくこそ有けれふく風のめに見ぬ人も戀しかりけり

ひをりの日とは騎射の日の事なり

あやなくは　わけもなく差別もなしなど云におなじ

○ヨノ中ト云モノハマアカウシタフザヤワイ。マア聞テ下サレ。因マタ一目モ見タフモナイ人モ。此ノヤウニ戀シイザヤワイ

右近のうまばのひをりの日むかひにたてたりける車の下すだれより女のかほのほのかに見えけれバよみてつかはしける　在原なりひらの朝臣

ひをりといふ名ハ。袖中抄の説のごとくなるべし

見ずもあらず見もせぬ人の戀しくハあやなくけふやながめくらさん

○見ヌデモナシ見タデモナイ人ガ此ヤウニ戀シイザヤガコレデハワケモナイフニ今日ハ一日シンキニ思フテクラスデアラウス

ゥヘし　よみ人しらず

しるしらぬ何かあやなく分ていはん思ひのみこそしるべなりけれ

○見タノ見ヌノト人カラハ何ンノイハウフグソレヤワケモナイフザヤ。戀ト云モノハ。思ヒバツカリコソハ。イツヅハアハレルシルヘナレ。其外ノフハナニモドウコウト云フハナイワイナ

かすがのまつりよまかれりける時に物見よ出たりける女のもとに家をたづねてつゝはしける　みぶのたゞみね

春日野の雪間を分ておひ出くる草のはつかに見えし君ハも

○春日野ノ雪ノアヒダカラ。ハエデヽクル草ノチットバカリ見エソメタヤウニハツ〳〵ニチョット見エタ御方ワイノマア

人の花つみしける所にまかりてうこなりける人のもとに後によみてつかはしける

春日野ノ祭（延喜式に春二月冬十二月共に上ノ申ノ日祭レ是とあり）

上の句は序なり

はなつみの事はるの巻にいへりこの山さくらをたとへいふとさなくともあるべけれど詞書に花つみしけるとあるにかすみの間よりなど云おもしろくつゞきたり

山櫻かすみのまよりほのかにも見てし人こそ戀しかりけれ　つらゆき

○山ノ櫻ノ花ヲ。霞ノアヒダカラ見ルヤウニ。ウス〳〵ト見タ人ガヤ
アサテ〳〵戀シイコヂヤワイ

題しらず　もとかた

たよりにもあらぬ思ひのあやしきハ心ハ人につくるなりけり

○何ンゾノタヨリニコソ。物ハコトヅケテヤルモノナレ。タヨリテモナイ。
此ワシガ思ヒノ。カハッタコトハ。此ヤウニ思フ心ヲソノ人ニツケル
ノヂヤワイカウイフノハ。タヨリニ物ヲコトヅケルト。心ヲ人ニツケ
ルト云ト詞ガ同ジコヂヤニヨッテヤ餘材わろし。打聞いかある意とも
聞とりがたし

はるかになるさうけたる詞にあらずはるかに聞つゝにてあひなんとはくもゐの如くはるかにしていつもしらぬとなりさてその人の名ば高く音にきゝつゝ戀わたるとなり

はつ雁のはつかに聲を聞しより中空にのみ物をおもふかな　凡河内躬恒

○空ヲ飛デイク始メテノ雁ノ聲ヲ聞クヤウニ。人ノ聲ヲハッ〳〵ニナヨット聞テカラ。心ガヒタスラ。ウテウテンニナッテ。サテモ〳〵モノ思ヒヲスルコカナ

あふてハ雲ゐはるかになる神の音にきゝつゝこひわたるかな　つらゆき

○コレホド戀シウ思ウケレモ。ナカ〳〵逢ハレサウナ。モヤウハ遠イコデ。タヾ雲ノ中デ鳴ルカミナリノ遠イ音ヲヨソカラ聞クヤウニ。音ニバッカリ聞テ月日ヲタテルコカナ

よみ人しらず

新撰和歌集には初の句夕されば奥義抄袖中抄には末の句人戀る身は

かた糸をこなたかなたよりかけて逢ずハ何を玉のを
にせん

○一筋ヅヽノ糸ヲ。合セテ玉ヲツナグ緒ニヨラウト思ウテ。ソノ糸ヲアチラヘコチラヘトヨリカケテ。モシツレガ一ッニ合ハイデ。緒ニナラズハ。玉ツナグ緒ニハ何ヲセウゾ。ワシガ戀モテウドソンナ物デ此ヤウニイロ〳〵トスレドモシシドウ逢ハレズバドウシテ。命ガッドカウゾ餘材打聞ともに。二の句の注わろし。これはたいさま〳〵として心をつくすとをたとへるなり。男女のこなたかなたをたとへたるにはあらず。

夕ぐれハ雲のはたてに物ぞ思ふあまつ空なる人をこふ
とて

○ユウカタニハ雲ノ手旗ト云テイロ〳〵ノ雲ガタツ物ヂヤガテウドソノ雲ノタツ空ノヤウニ何ソノ手ガヽリモナイ。遠イ人ヲ思フトテワシハ

ユフカタニナレバ。ソノ雲ノハタテノヤウニイロ〳〵サマ〳〵トサ物思ヒヲシマスル

かりこもの思ひみだれてわがこふと妹ぞ見るらめや人し
つげすハ

○苅タマコモノミダレルヤウニワシハイロ〳〵ト心ガミダレテ。此ノヤウニ思フト云フヲ。妹ハ知ラウカイ。人カイッテキカサズバ。コレホドニ思フトハ知リハスマイ

つれもなき人をやねたく白露のおくとハなげきぬとハ
去のばん

○国オキルト云テハナゲキ。チルト云テハシタウテ。アノアイソモナイ氣ヅヨイ人ヲ此ノヤウニ思ハウカヤ。サテモクチヲシイヤドウゾ思フマイゾ

ちはやぶるかものやしろのゆふだすき一日も君をかけ

おゝとはゝ起るとてはなりぬとはゝ寢るとてはなり

ゆふたすきは木綿を

たずさにするを云神宮等がつねにするとなればかけぬ日はなしといはん序にいへりかくるは心にかくるなり

ぬ日はなし

○[五]ワシハ一日モオマヘノコヲ云ダシテ思ハヌ日ト云ハナイ

我戀ハむなしき空にみちぬらし思ひやれども行方もなし

○ワシガ戀ハ。サテケシカラヌ戀デ。虛空ヘ一ツパイニフサガツタサウナリウデヤカシテ。思ヒヲハラシテヤラウト思ヘモ。ドッコヘモ行ガトコロガナウテ。ナンボウデモ此思ヒガハレテ。ユカヌ

するがなるたごのうら涙たゝぬ日ハあれども君をこひぬ日はなし

○此ノタゴノ浦ノ涙ハ。オホカタイツデモ立ツカ。ソレデモタマ〳〵ニハ此涙デモタヽヌ日ハアレドモ。ワシガオマヘヲ戀シウ思ハヌ日ト云テハケガナイ

夕づくよさすや岡べの松の葉のいつともわかぬ戀もする哉

アレアノ夕日ノ影ノサス。岡ノ松葉ハ四季トモニ同シ色デ。イツモ云ワカヲモナイガ。テウドソノヤウニワシハ。イツト云。ワカヲモナイ戀ヲマアスルコカナ。サテモ〳〵。千秋云。此初句ノ夕づくよ。夕づくひ昔より爾本有しと見ゆ。千五一番歌合に。六經卿さびしさをいかにとハまし夕づくはさすや岡べのまつの雪折をいハん。万葉集にハゆふづくひさすやと待り古今の歌を引て松をよまば夕づくよとか侍るべき云々かゝれば六經卿ハ夕づくはとある本によりてよまれ。季經卿ハ夕づくよとある本につきて詠せられたるなり。今師も譯ハ日とある本によられたり

打開に。松を待に。とりあしてとあふはわろし。そのこゝろはおし

あしひきの山下水のこがくれてたぎつ心をせきぞかねつる

○山ノ陰ナ川ハシゲツタ木ノ下ニカクレテ。ヨソヘ見エハセヲヒ。ゲウサンニサツサト流レオチルモノヂヤガ。ワシガ戀モテウドソノヤウデ。見エヌヤウニカクシテハ居ルケレド。雪ノ内サツサト瀧ノ流レルヤウデ。ソレヲセキトメウト思ヘド。中々セキトメラルヽコデハナイ

此歌後撰には女のもとにつかはしけるよしのふ制臣とありてかへしよみ人しらず木がくれてたぎつ山水いづれかはあふしも見ゆるし首にこそきけと見えたり

よしの川いはきりとほし行水の音にハたてじ戀ハしぬとも

○吉野川ハケシカラヌ早イ川デ。ドウ〳〵ト鳴ッテ。岩ヲ切リトホシテイクヤウニスルドイ流レヂヤガ。ワシガ戀モ。ムチノ内ハ吉野川ヂヤソレデモタトヒコレデ。死ハスルト云テモ。吉野川ノヤウニ。音ニタテ、人ニハシラレマイゾ

たぎつせの中にも淀ハありてふをなど我戀ハふちせともなき

○山川ハ早イ物ナレド。ソレデモ其ノ間ニハ。淵ガアッテヨドム所モアルト云フヂヤニ。ワシガ戀ハナゼ淵デヤ淀ヂヤト云ワカチモナシニイソモ早瀬ノヤウナコヅイ

山高み下ゆく水のまたにのみ流れてこひん戀ハまぬとも

ある人云山高み下行水とはふかく思ふたとへなり以上四首は水による戀の類なりこれより下この巻の中にしのぶ心をよめるは戀る人ひとりにいはじとしのぶなり後のまきなるは世の人にしのぶなりと

紅の花は末よりさき初るを摘とる故に末つむ花とをりと誰もとわれど思ふにたゞ輪の末少づゝ咲たるを摘ものなれば云るべし万葉によりにのみ見つつやこひん紅の末つむ花のかたにいづ云もとおりこれを少しかへしのみ

○山ガ高サニ。上ノ方ヲバイカズニ下ノ谷バッカリ流レル水ノトホリニワシモタトヒ此ノ分デコヒシニ、死ヌルト云テモ。ウハベノアラハシハスマイゾイッマデモ心ノ内デバッカリ思ウテ居ヨウゾ

思ひいづるときハの山のいはつゝじいはねばころあれ戀しきものを

○の山乃三口ヘダシテイハヌデコソアレ思ヒダシタキニハ夫は〳〵戀シイモノヲ

人まれず思へばくるしくれなゐの末つむ花の色にいでなむ

○人ニシラサズニ心ノ内デバッカリ思フテ居レバキッウシユッナイ。コレデハドウモタマラヌホドニ圖イッソウチダシテノケウ

秋の野の尾花にまじり咲花のいろよやこひんあふよしもなみ

はつえハ上枝(かみつえ)云しつ
えハ下枝を云日本紀
應仁天皇の御歌にか
くハし花摘つしえ人
みなとりはつえハ島
あからしとよめり

○此ヤウニ心ノウチデバッカリ思フテ居テハ。トテモドウシテモカウシテモ逢ハレサウナ。モヤウガナサニ。シアンシテ見レバ上イッソウチダシテカヽラウカイ。　上句打聞の説よろし

わがうの丶梅のほつえにうぐひすの音に鳴ぬべき戀もする哉

○アサコチノ庭ノ梅ノ木ノ高イ枝デ鶯ガユッカ。ワシモアノヤウニ聲ヲアゲテナキモセウヤウニ思ハルホドノ戀ヲマアスルアラレモナイナカナ

あし引の山ほと丶ぎすわがことや君よこひつ丶いねがてにする

○夜ルモヨヒトヨチラレヌニヨッテ聞テ居レバ。ヒクモノ郭公ガ。鳴ガアレモソレガ君ヲ思フヤウニ。戀ヲシテチラレヌコトカイ。三四の句は。わが君に戀ることや。こひつ丶といふ意なり。

夏なれば、夏されば
を誤りしかまた六帖
に夏しればとありし
かにもあらんか

みうきハ身そゝぎと
いふ義なり被せんと
てまづ身をばそそぎ
清むるなるより身祓
と被除ハ二つのもと
なるを後にハみそぎと
のみもはらひの事を
いへり

夏なれば宿にふすぶるかやり火のいつまで我身下もこにせん

○夏デイハウナラ。テウド家ノマヘデタク蚊遣火ノ上ヘアラハレテハモエズニイッマデモクス〳〵トフスボッテアルヤウニ。ワシガ身モ此ノヤウニイッマデ人ニハイハズニ胸ヲモヤシテ居ルデアラウ

夏あれば、夏の物にてたとへていはゝといはんがごとし秋なればともあるそれも同じ意なり

戀せじとみたらし河にせゝこみそぎ神はうけずぞなりにけらしも

○ドウゾ戀ヲスマイト思テ。御手洗川デシタミッギヲ。神ハトウ〳〵御ウケナサレヌサウナウイマア。　サウカシテヲカラ戀ガヤマヌ

あはれてふをだよなくハなにをかは戀のみだれのつかねをにせん

○思ヒガ胸ニ一ツ杯ニナルトキニハ。壁ヲアケテ。アヽアハレアヽアハレトイヘバコソスコシハ胸モユルマレ。ソノアヽアハレト云フサヘナクバ。戀スルモノハ何ンデ心ヲナサメウゾ。テウド菅ナドヲ苅ノ亂レタ時ニ。一トコロヘトリアツメテ。緒デユヒツカヲルヤウニ。戀テ心ガ亂レタ時ニハアヽアハレ〳〵ト云ノカ束ヲ緒デヤ

思ふよハ人のぶるをぞまけよける色にハ出じと思ひし物を

○ナンボシノンデ見テモ。思ウ方ガツヨイニヨツテトウ〳〵シノブ方ガヤマケタワイ。イツマデモ色ニハダスマイト思ウタモノヲ

我戀ハ人ぞるらめやきたへの枕のみこそぞるはしるらめ

○此ノ通リニキツウシノベバ。ワシガ戀スルノハ。人ガシラウカヤ。タレモ知ル人ハアルマイ枕バツカリコソハ。夜ル〳〵シテヲルモノナレバ。

モノ知ヤナラシリモセウケレ

淺茅生のをの〳〵ぞのいらぞのぶとも人ぞるれめやいふ人ぞしよ

○[二三]此ヤウニ忍デ思フト云フモ君ハ知ウカイシリヘスマイ。云フヲキカス人ナシニハ

人ぞれぬ思ひやなぞとあしがきのまぢかけれども逢よしもなき

○人ニシラサヌコノ思ヒトシタフワイノ[三]マヂカイ所デヤケレドモ。なぞと ナゼニアハレルモヤウノナイフゾ。千秋云。二の句なゾとのどもじ。歌注打聞なぞに。たゞなゾなり。といいゝ辭ハ。いはれぬやうなれどもとバのたすけにおきたるなり。とあるハ心得ず。助辭よともじを用ひたると。をさ〳〵見へず此。といかならず。もを寫し誤りて傳へたるにて。もといなぞもよてゞ有けん。なゾもハ古歌ハ例多く見ゆちかく

淺草生は小野といはん冠辭なりしのぶといはんとてしのハらと云

は此ノ巻の中よりかゝり火ノ云々なども かくとありもと。とと字の形よく似たり

思ふともこふともあいん物なれやゆふてもたゆくとくる下ひも

○イカホド思フタト云テモコヒシタウタト云テモ逢ハレウモノカイドウデアハレルヿデハナイ。ソレニ又シテモ〳〵。ムスブ手モタカイホドセッ〳〵下紐ガトケル。物体シキリニ人ニ逢ヒタウ思フ時ニハ下紐ガトケルモノヂヤト云フギャガ〳〵ワシハナニホドアヒタウ思フテ下紐ガトケタト云テトテモ逢レハセヲバ〳〵何ノセンナイヿヂヤニ。打聞下句の説上句にかけ合わろし

いで我を人なとがめぞ大ぶねのゆたのたゆたに物おもふころぞ

○イヤサ。コレ貴様タチソ。ヤウ〳〵トガメテ下サルナイ。ワシハ大キナ

これは女の歌なるべし

いでは日本紀に感乞と訓高樂には乞の字のみをかけり

和名抄泛子ウケとよめりうけハ水にたゞよひてところさだめぬもの故にたとへ云り

打はへて打のべてといはんがごとしさてくりよする物故にくるしといはんとて上にいへるなり

舟ノ涙ニユラレルヤウニ物思ヒデウガラ〳〵トシテ居ルシセシヂヤスレヤアヂナ顔ッキニ見エルバズヂヤ

いせの海ゝ釣するあまのうけなれや心ひとつをさだめかねつる

○戀ヲスルワシガ心ハイセノ海デ獵師ノ釣ヲスルウケヂヤカシテ。フハラ〳〵トウカレテシヅメウト思フテモドウモシヅメラレヌ。釣ノウケト云フモノハ涙ニユラレテ。フハラ〳〵トウキアルク物ヂヤガ心ガヲウドツノヤウコサ

いせの海のあまの釣縄うちはへてくるしとのみや思ひ渡らん

○一二戀ユエニ長イ月日ヲ。此ノヤウニシユツナイヿヤトバッカリ思フテタテルヿデアラウカ。　千秋云。あまのつりなわうちはへてくる。とつゞけたるは。いと〳〵長き縄ゝ釣の枝糸をあまたつけて。海の中へ。

なみだ川いせに在といへど地名にあらず

遠くうちはへおきて。その繩をくりよせあげて。かの釣をくひたる魚どもをとるわざあり。これなり。今世よこれをながの〻釣といふ。長繩の釣といへるを訛れるなり國よりてい。ながなゐともいへり。この歌うちへて。くるといへるよのつねの釣よては。かなはぬとなり

涙川なほとゝなかゝをたづねけん物おもふときの我身なりけり

○涙川ト云川ノミナカミハトコヂヤカトナゼ思フタヽヤラツノ川ノミナカミハドコデモナイ物ヲ思フキノ此ノワシガ身ヂヤワイ。ハテ涙ハ身ヲ出ルハサテ

たねしあれば岩ほも松ゝおひまさりけり戀をしこひゝあゝざらめやゝ

○タヲガアレバ。岩ヘモ松ハハヘルワイ。スレヤナンボ出來ニクイ戀ヂヤト云テモ隨分骨ヲ折リサヘシタナラ。逢ハレヌト云フガアロカイ。ドコ

空にうきてといはんとて上はおきたり

ねをのみなくといふに上はいひ出でたれど鶴にゝみたるといふ詞あるによりよめるなり

ゾデハアハレヌト云フハアルマイ

あさなゝたつ朝霧の空まのみうきて思ひのある世なりけり

○毎朝タツ川ノ霧ノ中ニウイテアルヤウニイツモ落テ付カヌ思ヒノアル世ヂヤワイ

忘らるゝ時しなければあしたづの思ひみだれてねとのゝぞなく

○ワスレラレル時ガナケレバ。三イロ〳〵ト思ウテ泣テハッカリサ居ルワシヤ

から衣ひも夕ぐれになる時ゝかへすゞも人ゝこひしき

○三ひも毎日ユッ方ニナレバカヘナ〳〵モナカノ人ガ戀シイ

よひゝにまくらだめんかたもなしいかまねゝ夜か夢に

よひゝハ毎晩のことゞり新撰和歌集にこ

見ようけん

○イッヅヤ戀シイ人ヲ。夢ニ見タ丁ガアッタガ其ノ夜ハドチラ枕ニドウシテ寐タ時デアッタヤラ。思ヒダシテ見レド覺エヌ。ソレデ此ゴロモ、何晩〳〵ドウヅ夢ニ見ヤウト思ヘド。ドチラ枕カヨカラウヤラ定メウヤウガナイ

餘材打開ともよ上の句の說たがへりよく上下の詞を味ひて去るべし

戀しきに命をかふるものならばしにいやすくぞあるべかりける

○命ヲ此戀シサノクルシイノニカヘテ死ナルヽモノナラ。死ヌルハヤスイコデサアラウト思ハレルワイ。此クルシイメヲセウヨリ。死タ方ガハルカマシヂヤ

人の身もなほとも物をおもはずしていざ試みん戀やしぬると

いせ物がたりにおもふといはでぞたゞにやみぬべきわれにひとしき人しなければといふうたを思ひあはすべし

なゝハなりれなどいふにおなじなりねをつゞめてなれと云

○人ノ身ト云モノモ。ナンデモナラハシガラナモノヂヤ。戀シイ人ニアズニ居テモソレガナラハシニナッラ。ソノ通リデ居ラルヽモノカ〳〵又ソレデハコダヘラレイデ。死ヌル物カ。ドレヤ。逢ノズ居テタメシテ見ヤウヅ

ふのぶれとくるしきものと人しれぬ思ふてふと誰に語らん

○思フコチ隱シテ居ルノハサテモ〳〵苦シイニ此ヤウニ人ニシラレズニ心デバッカリ思フト云コトヲ。誰ニナリ比語リタイモノヂヤ。ガタレニ語ラウヅ。タレニモ語ラウ人ガナイ

來ん世にもはやなりなゝんめのまへつれなき人を昔と思へん

○イッソ早ウ來世ニナッテシマヘバヨイニ。ソシタラ此現在目ノマヘニツレナイ人ヲ昔ノコヂヤ思ウソウニ。昔事ヂヤト思フタラ。コレホドニツラ

涅槃經に是身無常念念不住云〳〵如シレ雨レ水ヲ隨レ雨隨テ合フ

まどふハまよふにおなじ

ウハ思ハレ・マイワサ

つれもなき人をこふとて山彦のこたへするまで思ふなりけり

○アイゾモナイ人ヲ戀シヲ思フトヲワシハマアヒ山ノ中ナラコダマノヒドクホドコサテモ〳〵大キナタメ息ヲツイテナゲイタカナ

行水にかきかくよりもはかなき思いぬ人をおもふかりけり

○流レテイク水ヘ物ノ數ヲカキ。トメルノハヂツキニ消ナジヤヘバ。ナンノナイラチヲアカヌヲヂヤガソレヨリマダキツイジチノアカヌヲハ。コチヲ思フテモクレヌ人ヲ。コチカラバツカリ思フノヂヤワイ、ワシガ戀ハサウヂヤワイノ

人を思ふ心い我にあらねばや牙のまどふだましられざるらん

○人ヲ戀シウ思フ心ハ。我心ヂヤケレド。我心デハナイヤラシテ。此我身ノマヨウノサヘシレヌ。モシコノ心ガキツト我心ニチガイナクバ。我カハツタモノヂヤ

思ひやるさかひはるかになりやするまどふ夢路はあふ人のなき

○人モナイハルカナ國ヘイタナラ道デ逢人モアルマイカ。テウドツンナモノデ。ワシガ戀シイ人ノヲチ思ヒヤル其心ノイク道モ。ダン〳〵遠ウナルカシラヌ。サウカシテ。アチコチト思フテ夢ヲ見テモ思フ人ニアフ夢ハ見ヌ。打聞上句の意たがへり

夢のうちに逢見んとを頼みつゝくらせるよひいねんかたもなし

○セメテハドウヲ夢ノウチニ逢ハウト思フテ。ヒルノ内カラソレヲ頼ミ

戀集に誰がために君を戀らんとひわびて我ハわれにもあらぬなり行

此我ハ我にもあらぬといふに同じ

テ暮ッシタ夜ハ。ドチ枕ニドウ寝タナラ夢ニ見ラレウゾ。ドウ寝タモノデアラウゾト。心ガマヨウテ。ドウモ寝様ガナイ。餘材打開ともよ。結句を解ゐず。上なる「いかよねし夜か夢よ見えけんといふ歌と合せて心得べし

こひしねとするわざならしうゞ玉のよるいすがらに夢よ見ゐつゝ

○コレハマア。戀デ死ンデシマヘト云フサウナ。ナマナカニ。夜ルハヨヒトヨ夢ニ見エテ、思ヒチサセテ。ホンマニハチカラアハレデサ

涙川まくら流るゝうきねよい夢もさだかよ見ゐすぞありける

○涙ガ川ノヤウデ枕ガ流レテ川舟ノ中デ浮ヲ寝ルヤウナ。カウイウ浮寝デハ見ル夢モハッキリトハザ見エヌワイノ

戀すれば わが身い影となりにけりさりとて人よそいぬもの故ハものながらの義なり

新撰萬葉にハ二三の句我身ぞかげとなりにけるとあり

下にもゆるは水そこをいひて心の中にもゆる也心の中に思ふを下に思ふと云ハあまたよめり

もゆる

○戀チスレバワガ身ハ。此ヤウニヤセテ。影ノヤウニナッタワイ。サウカト云テ思ウ人ニ添ヒモセヌモノヽクセニサ。影ナラ人ニソヒソナモノヂヤニ

かゞり火にあらぬわが身のなぞもかく涙の川ようきるもゆらん

○鵜飼舟ノカヾリ火コソ川ニ浮テモエル物ナレ。カヾリ火デモナイワシガ身ノナゼニマア。此ヤウナ涙ノ川ニウイテ。胸ニ思ヒノ火ガモエルコヤラ

かゞり火よ影となる身のわびしきい流れて下よもゆるなりけり

○川ヲ流レテタダル鵜飼舟ノカヾリ火ノ移ッタ影ハ水ノ下デモエルノカ。ワシモテウドソンナモノデ。戀ニヤッレテ影ノヤウニナッタ身ノ。

六帖にハ五の句うゑて見ましなとありて貫之の歌なり

ツライ難儀ナコトハ。長イ月日ヲ。心ノ内デバツカリ思フテ。ムチノモエルノヂヤワイ

はやき瀬ゝ見るめおひせば我袖の涙の川おうゑましものを

○ミルメト云モノハ海ノ中ヘハエルモノヂヤガ。ソレガ若ヶ川ノ早イ瀬ヘハエテソダツナラ。ワシガ袖ノ涙ノ川ヘウエウモノ。ナゼニナレヤワシガ涙ハ早イ瀬ノヤウニ流レルソシテ。戀シイ人ニ逢フ子チミルメト云ユヨツテサ清

おきへよるもよらぬ玉藻の波のうへゝまどれてのゝや戀渡るらん

○ワシノ戀ハ沖ノ方ヘモ磯ハタヘモヨラズニ涙ノ上デミダレテアル藻ノヤウニドチラヘモツカズニ心ガ乱レテ。イツデモ此ノヤウニ。戀シイ〳〵ト思フテバツカリ月日ヲタテルデアラウカ

あしがものさわぐ入江のしら波のしらぎや人をかくこひんとゝ

○此人ヲ今此ノヤウニ戀シウ思ワウトハ。思ヒモヨラヌコヨ

人しれぬ思ひを常ゝするがあるふじの山こゝろ我身なりけり

○常住人ニシラサヌ思ヒヲスルワシガ身ハ。外ニハナイ。駿河ノ富士ノ山ガサワシガ身ヂヤワイ。ナゼト云フニ富士ノ山モ火ハモエズニ常住烟ガ立テモエルハサテ

とぶ鳥のこゑも聞えぬおく山のふかき心を人ゝしらずや

○イカウ深イオク山デハ。鳥ノ聲モセヌモノヂヤガ。ソノクラ井ノ奥山ホド深イ此ワシガ心ヲ。思フ人ハサウトハシラヌサウナガ。ドウヅ知テクレカシ

打聞にハ人ハしらなんとあり

六帖にハ下の句いハでしもこそこひしかりけれとあり

後撰にこの歌をのせて詞書に返しせぬ人につかハしけると見え そのかへし

あふ坂のゆふつけ鳥もわがごとく人や戀しきねのゝ鳴らん

○相坂ニハトシテアルアノ木綿チツケタ雞モ人ガ戀シイヤラ。オレト同ジヤウニ聲ヲアゲテヒタスラ鳴。打聞ゆふつけ鳥の説わろし

逢坂の關ゐ流るゝいゝし水いはでこゝろゐおもひこうすれ

○㊀イハズニ居ルデコソアレ。心ニハタイテイ思フ「デハナイ

うき草のうへゝしげれるふぢなれや ふかき心をしる人のなき

○ワシノ深イ心底ヘ。ウヘニハ浮草ノシゲツテ見エヌ淵ヂヤカシテ。此ノ深イ心底ヲ。人ガ知テクレヌ。フカイ「ガ見エヌサウナ

打わびてよゞゝん聲ゝ山彦のこたへぬ山ゐあゝじとぞ思ふ

山彦のこゑのまに〳〵とひゆかバむなしきそらに行や

入紐ハ雌紐雄紐とて柴束の時とり合せてさし入るものなりよりて入紐と云ふ太刀にも入紐ありて片方を輪にしてそれへ入て結ぶなり

○サシツマツテセンカタナサヘ大キナ聲ヲシテヨバヽツタナラ。其聲ニハヨモヤ。コタマノヒヾカヌ山ハアルマイトサ思フ。大キナ聲ヲスレバ必コタマノヒヾク通リデワシノコレホドニ深ウ思フ「ナレバアチラカラモスコシハ何ントヅ思フテクレツナモノヂヤ

こゝろがへそる物ゝもがかた戀いくるしき物と人ゝしらせん

○タガヒニ人ノ心ガトリカヘラレル物ニシタイモノヂヤ。ソシタラコチノ心トアチノ心ト入カヘテ片思ヒハタルシイモノヂヤト云フヲアノ人ニ思ヒシラサウニ

よそゝしてこふれぱくるしい紐の同じ心ゝいぞむすびてん

○今ノトホリニヘダツテヨソテ戀シウ思フテ居レバクルシイニ。兩方ノ紐ヲ一所ヘムスビ合スヤウニドレヤコレカラハ一所ニ居ルヤウニセウ

ブ。おなじこゝろよといへるゝ。或人ノ云からぶみは同心結といふことあるよよれるなり。といへり。又今おもふは。ところをこゝろと寫しあやまれるにや

春立ばきゆる氷の殘りなく君が心ゝわれはとけなん

○春ニナレバ氷ノ殘ラズトケルヤウニ君ガ心ハドウゾオクソコナウ我ニウチトケヨカシ

あけたてば蟬のをりゝへ鳴くらしよるゝ螢のもえこそ渡れ

○夜ガ明レバ晝ハ蟬ノヤウニヒガナ一日ナイテクラシ。夜ハ螢ノヤウニ思ヒニモエテ夜ヲアカシテサ月日ヲタテルワイ

夏むしの身をいたづらはなをともひとつ思ひはよりてありけり

○夏ノ比虫ノ火ノ中ヘトビコンデ。ツイ我身ヲムダニシテシマウノモ火をりはへゝ打いへに同じはへハ經るなり日めもす夜もすがらの歎きを云なり

思ひを火にとりなすと例のことなりよりて身のいたづらにとはい〳〵り飛蛾とも蜀蛾ともいふものなり

そハりハそふを延たる詞なり

此歌ハ小町集に入て下の句あやしかりけり秋の夕くれとみえたりあやしと云ハ常に異なるなり

チトラウト云ッ思ヒ一ツニヨッテノ「ギヤワイ。人ノ戀ヲスルノモテフド其通リデ。人ニ心ヲカケテ。ツイ我身ヲシモチノケル「ギヤアアゝ戀ハスマイ「ギヤゲヤ

餘材打聞ともよひとつおもひの說わろし

夕ぎれはいとゞひがたきわが袖は秋の露さへおきそいりつゝ

○戀ナスレバタヾサヘ涙ガカワキニクイワシガ袖ヘユフカタニナレバ此ノ時節ノ露マデガオキソフテサ。イヨ〳〵カワカヌ

いつとても戀しかりけりあゝねども秋の夕ゝわやしかりけり

○イッギヤト云テモコヒシウナイト云「ハナケレドモ。ツノ内ニモトリワケテ秋ノ時分ノ夕方ハ又カクベツニドウモタヘラレヌヨイ

秋の田のほゝてそ人をてひざらめなどか心は忘れしも

せん

○[二]サウト顯ハレテ思フフリコソスマイケレ心ニハ何ンノ忘レウヅイハ
セヌ

秋の田のほのうへと照すいな妻の光のまにも我やわす
るゝ

○秋ノ田ノ稻ノ穗ノ上ヘイナヅマノピカリト光ルホドノチョットノマモ
ウシハオマヘノコヲ忘レルカイソレホドノ間モワスレハセヌヅイワシ
ヤ

人めもる我かいわやな花をゝきなどかはゝ出て戀ぞし
もあらん

○人目ヲハヾカル我身カイオレハ何ニモ人目ヲハヾカルコハナイニ。ア
ウケモナイニアウケモナイナンノタメニ此ヤウニアラハサズニバッカ
リ思フヲ居ヤウヅ

欠

MISSING

法華經五百弟子品曰以無價寶珠繫其衣裏與之去云々この文講する時清行も小町もさゝ座にありて聽聞しける故に是にとよせてよみて贈るなるへし

をのゝまちかもとよつかはしける　あべのきよゆきの朝臣

つゝめども袖にたまらぬしら玉は人を見ぬめの涙なりけり

○眞セイノ談義ニトカレタカノ法華經ノ衣裏寶珠ノ事ニツイテサ。ナンボ袖ヘツヽンデモ。タマラズニコボレテ出ル玉ハ戀シイ人ヲエ見ヌ目カラコボレル涙ヂヤワイ

こまち

おろかなる涙ぞ袖に玉はなす我ゝせきあへずたきつせなれば

○ワシガ涙ハ又〻ソンナコツヂヤナイトウモセキトメラレヌホド流レデ瀧ノ水ヂヤ。スレヤオマヘノソノ袖ニツヽマレヌ玉ト見エルクラヰノ涙ハオロカナコイノ

寛平ノ御時きさいの宮の歌合のうた　藤原ノとしゆきの朝臣

戀わびてうちぬる中に行かよふ夢のたゞぢは現ならなん

○思フテモ〳〵モアハレハセズ。戀アグンデ。スコシチムツタ間ダニ通ウト見ル夢ノスグミチハドウゲホンマノコデアレカシ。夢デコソズツト通ハレル直道ナレ。ホンマニハソンナコハ及ビモナイコ。イツヽモ戀ワビテ居ル中ヂヤモノ。中は思ふ人との中あり。然るを餘材に。ねたる中ありと。いへるに。かはらず。もししからば。うちぬはどにとこそあるべけれ

すみのえの岸による波よるさへや夢の通路人めよぐらん

○書ホンマニカヨフ道デハ人目ヲハバカルモ。ソノハズノコヂヤガ。曰夜ル夢ニ通フト見ル道デマデ。人目ヲハヽカツテヨケルヤウニ見ルノハドウシタコトヂヤヤラ

これは波のよるを夜にいひかけて上は序なり万葉には曲道と書てよぎみちとよめり後撰にはこの詞をとりてすみのねのきしのしらなみよるよるなど云たゞひのつゞきあまた見ねたり

わが戀はみ山がくれの草なれや人しれぬまに茂りぬるかな

○ワシガ戀ハ。山ノオクニカクレテアル草ヂヤカシテ。段々トシゲサガマサルケレドモ。サウト云コヲ知テクレル人ガナイ

をの〳〵よしきのとものり

よひのまもはかなく見ゆる夏虫の迷ひをされる戀もする哉

夏虫は燈蛾なり。

○アノヤウニ夏虫ノ火ヲトラウト思フテ飛入テ。雷ノ間ヲモエタモタズニツイ命ヲシヤウテノケルノハ。キツイアハウナコヂヤト思ハルガ。ワシヤ又此ヤウニ人ニアヒタイ〳〵ト思フテ戀ニ身ヲシマウノハ。アノ

万葉には勝異殊等の字をけとよみてとにまされる義とす

衣手といへば袖のことなり

上は序にてかゝれたるところなし

夏虫ノ火ニヤヨウノヨリハ。ナホマサツテサテモ〳〵マアアハウナ
カナ。餘材ヾよひのまの説たがへり。

夕されヽ螢よりけにもゆれども光見ねばや人のつれなき

○毎日夕方ニナレバヽ螢ヨリモナホワシハ。思ヒガモエルケレドヽワシガ此ヤウニモニル思ヒハ。螢ノヤウニ光リガナイニヨツテ。見エヌエエニ人ガツレナイカシラヌ。光リガアツテ見タナラヨモヤカウツレナウハアルマイフヂヤワサ

さゝの葉におく霜よりも獨ぬるわが衣手ぞさえまさりける

○サヽノ葉ヘフツタ霜ハキツウサエルモノヂヤガ。ソレヨリモヒトリチルワシガ袖ガ。ナホキツウサエテ寒イワイノ

わが宿の菊のかきねにおく霜のさえかへりてぞ戀しゝ

新撰万葉にさゝのかきねにおく霜の消かへりてもあはんとか思ふとありて冬の歌に入られたり

りける

○上イヤモウキツウ〳〵キエ入ルヤウニ戀シイワイノ

餘材打聞ともに。さへかへりの説わろし。すべてわきかへりしにかへりあゞいふ類みな。其事のいたりて甚しきをいふ詞あり。今世の語にも。にえかへるひえかへるなどおほくいふと。同じとおるをや。

河の瀬にあびく玉藻のみかくれて人に逢られぬ戀もする哉

○川ノ瀬ノ底ニハエテナビイテアル藻ノ水ニカクレテシレヌヤウニ思フ人ニシラレヌ戀ヲワシハマアスルヿカナ

みぶのたゞみね

かきくらしふる白雪の下消にきえて物思ふころにも有かな

○雪ノ下カラ消ルヤウニ。ワシハ人ニハ云ハズニ此ゴロハホンニ消入ル

みをつくしとは舟のかよふところを水尾と云つるれに標の杭をたつるなりつは勅撰にて水尾杭なり延喜式に難波津頭海中立澪標土佐日記にみをつくしのもとより難波につきて河尻に入とあり

玉のをばかりはしばしのはどといふにいへり

ヤウニ物思ヒヲヤアスルヿカナ

君こふる涙のとこにみちぬれば身をつくしとぞ我はなりけり

清藤原おき風

○ミチツクシト云モノハ海ノ中ニ立テアルモノヂヤガ。ソシハ君ヲ戀シウ思フテ泣ク涙ガ。テウト海ノシホノミチタヤウニ。床イッパイニ。ミチタレバ。ソノ床ニヲテ居ルワシガ身ハ。トントソノミヲツクシニサ。ナッタワイ。ソシテソノミヲツクシト云フ名ノトホリニ。身ヲツクシテシマウテノケルデアラウ

逢ぬる命いきるやするとて〻ろみに玉のをばかりあはんといはなん

○トウテ戀デ死ヌル此ノ命ガ。若シヒヨット。生ノビルヿモアルカ。物ハクレニメシヂヤニドウヅ。短イ玉ノ緒ノアヒダホドナリトモ。ヲヨット逢ウ

ト云テクレカシ

わびぬれば逢ひて忘れんと思へども夢といふ物ぞ人だのめなる

トットモウ戀ニナンギシハテタレバ。ドウヅシテムリコ此事ヲ忘レント思ヘヒ。夢ニ逢ウト見ルヿガアルニヨッテ。又ヒヨットアハレルヿモアラウカト。ソレガ頼ミニ思ハレテ。ソシテアハレモセヂバ。アヽヽ夢ト云モノハヤ。人ニ頼モシウ思ハセテオイテ。何ンノヤクニタヽヌモノヂヤ打聞ニ。人だのめを人だのまれとあるはたがへり。人だのませとこそいふべけれ。めは即チませのつゞまりたるなり

よみ人しらず

わりなくもねてもさめても戀しきり心をいづちやらばわすれん

○ナラヌコトヲムリニ此ヤウニマア。サテ〳〵ヲテモオキテモ戀シイコ

新撰万葉にはわりなくが嘘てもさめても戀らるゝうちみをいづちやりて忘れんとあり六帖には上の句ろれと同じく下の句は今とおなじ

今の本には名にやのこちんとあり新撰万葉に名にや立なんとあるが聞にやすゝとわりもよろし

こがるゝ色など云もみな火より云さらばもゆる火の色に出ましをといふを色燃なましといひしなり色もゆると云もやがて火の色の名あり

トカナ。コレデハドウモタマラヌガ。此心ヲドチヘヤツタラ。此戀ヲワスレルデアラウゾ

戀しきよわびてたましひまどひなげむなしきからの名にや殘らん

○此ヤウニ戀シイノニ。トット難義シハテ、。モシヒヨット魂ガマヨウテドコゾヘインデシマウタナラバアトハ此身ハムナシイヌケガラニナルヂヤガ。ソシテ思フ人ニアヒモセヌムナシイ戀ノクセニ。戀デ死ダト云フガ殘ルデアラウガ。四の句は。魂のさりてむなしきからとある意を。逢事なくて。むなしき戀なからにといふ意に、いひかけたるものなり、

君こふる涙ーなくはからころもむねのあたりは色もなしなましー清

紀貫之

○君ヲ戀シウ思フウシガ胸ハ。思ヒノ火ガモエルケレド。泣ク涙ヲケセバコソアレ。モシ此涙ガナクバ。衣物ノムネノアタリハ。思ヒノ火デモエル色ニナルデアラウ

題しらず

よとゝもに流れてぞゆく涙川冬もこほらぬみなわなりけり

○川ハ冬ハ氷ッテ流レガトマルモノヂヤガ。ウシガナクコノ涙ノ川ハヂヤウヂウ流レテヲトマル時ハナイ。冬デモ氷デヌ水ヂワイ

○千秋云。歌にみなわとあるを。水の沫とは譯せずして。たゞ水とのみ譯せられたり。これをもてすべて歌の譯法を思ふべし。又この歌みなわとよめるは。水とのみにては聞たらざる故なるとをもさとるべし

夢路よも露やおくらんよもすがら通へる袖のひぢてかわかぬ

○夢ニ思フ人ノトコロヘ通フ道ヘモ露ガオクヤラ。ヨヒトヨ夢ニソノ道チカコウタ袖ガ。ヒッタリトヌレテ今朝モカワカヌ。イヤ〳〵ヨウ思

六帖に貫之けさのあさげつゆおきながらにこひしきはあかぬ夢路をこふるなりけり

六帖にまとなきものおもひせばいつはりになみだはかねておとさじらきし今と同じ意なるはいづれか前ならん

ヘバサウデハナイ。コレヤ涙デヤウイノ

はかなくて夢にも人を見つる夜はあしたの床ぞおきうかりける　そせい法師

○タヾチヨツト夢ニデモ思フ人ヲ見タ夜ハ。ソノ朝ノ床ガサ。ハナレテ起トモナイワイ

いつはりのなみだなりせばから衣濁きぬのびよ袖はきぼらざらまく　かぢはらのたゞふさ

○戀シイフリヲシテ。ウソニ泣テ見セル涙デアラウナラ。隨分人ニ見セウトコソセウケレ。此ヤウニ人ニ見ラレマイト。シノンデキルモノヽ袖ヲシボルコハアルマイニ

大江ノ千里

夜たゞは夜直なり夜どはしになくといふはとのとなりたゞ鳴になくといふはひ鳴に帝といふに同じ

是はたゞ空なる戀をするといはんの上は序なりそらなるとはあなをもこなたへもつくかたなきをいへり

ねになきてひぢにしかども春雨よ濁れにし袖ととはゞこたへん

○泣テ此ノヤウニヒツタリトヌレタ袖デヤケレド。モシ人ガ問フタラ。春雨ニヌレタノデヤトイハウ

としゆきの朝臣

わがごとく物やかなしき時鳥ときぞとなくよたゞ鳴らん

○時鳥モオレガヤウニモノガカナシイカイ。時シホナシニ夜ニハヒタモノアノヤウニナゼ鳴クヤラ

つらゆき

さつき山梢をたかみほとゝぎすなくねそらなる戀もするかな

○泣テバッカリ居テ。ウカ〳〵トシテ。心モソゾロナ戀ヲマアスルコ

立ゐのうら上に同じ忘なりおもほえなくはおもほえぬを延たる詞なり

ある人の秋ぎりのはるゝ時なきといふ緣もて立ゐのうらとはいふなり

カナ

秋ぎりのはるゝ時なき心にはたちゐのそらもおもえらなくに

凡河内みつね

○戀ヲスルデハレル時モナイ心デハ。トント起居スルノモソドロデウカ〳〵トメオボエヌ

藤原ふかやふ

虫のでと聲にたてゝはなかねどもなみだのみこそ下にながるれ

○人ノマヘヲシノブユエニ。虫ノヤウニ聲ヲ立テハナカヌケレド。ナイシヨウデハ。涙ヲナガシテバッカリヨ。ヲリマスワイ

是貞みこの家の歌合の歌

よみ人しらず

秋なれば山どよむまで鳴鹿のわれおとらめやひとりぬる夜は

○ヒトリヲタ夜。オレガ泣ノハ。秋デイハウナラ。山ザウヘヒヾクホドニナシ鹿ニモオトラウカ。オレハ鹿ヨリナホキッウ泣ノ

秋なれば山どよむまでとは。秋の物にてたとへていはゞといふ意なり。夏なればともあるに同じ。

題志らず

貫之

秋の野にみだれて咲る花の色の千種に物をおもふころかな

○此ゴロハイロ〳〵サマ〳〵ニ心ガミダレテ。サテモ〳〵コンナ思ヒヲスルヿカナ

みつね

ひとりして物を思へば秋の田のいなばのそよといふひ

六帖には二の句をなぐさに咲るといひ四の句をみだれてものをとあれども今の方よろしみだれてを思ひみだるゝにたよれり

稻葉の風にふれてうよ〳〵となる音をう

れよといひかけたり

雲ゐのよそと云は遠きとにいふなり

とのなき

○ヒトリ此ノヤウニ物思ヒチシテ心チクルシメテ居ルニ目いなばのソレヨ御ダウリヨト云テクレル人ガナイ。ひとりしては。ひとりあり。思へばは思ふにの意あり。みあふるきいひざまあり

人を思ふ心は雁にあらねども雲ゐよのみも鳴わたるかな　ふかやぶ

○人ヲ思フ心ハ雁デハナケレドモ。雁ノ空ヲ鳴テワタルヤウニ。サテモ〳〵ワシガ心ハ。ウカ〳〵トウハノソラニナツテマア。泣テバッカリタテルコカナ

餘材。二三句の注。ひがとあり。かりそめの意はあし。打聞。雲ゐの説。この歌にはかゐはず。

たゞみね

後撰秋のよに人をしづめてつれ〳〵とかきなす琴のねにぞなきぬる

或抄とかきなすはかきならすなり万葉に琴の字鳴の字をなすとよめり

常よりもまさるといはん序なり秋ニハ雨ガフレバウツトシクナルシ人ハ恋ヲスルトキハ秋ニ成テ

秋風にかきなす琴の聲よさへはかなく人のこひしからん

○自身ト引ナラス琴ノ聲ノ秋風ノ吹クヤウニ聞エルニマデ人ガ戀シイ此ヤウナチヨツトシタコトニマデ。ヂキニ此ヤウニ戀シウ思フハ。ドウシタコトヂヤヤラ

○千秋云。譯に自身トヒキナラスとある。自身といふと。歌に見ねず。いかにといふに。これはみづからひ〳〵琴にあらざれば。かきなすといへる詞いたづらなり。さればようの琴のねにはあらざるとを。たしかにしめさんために。わきて自身といふとを添られたるなりすべてこの類多し。なほざりに見過すべからず

まこもかる淀の澤水雨ふればつねよりとにをさるわがこひ　つらゆき

○目雨ガフレバ。ウツトシウ物サビシイ故ニ。ツネヨリモカクベツニ戀ガヤサル

やまとよ侍りける人につかはしける

家の集には間やわたらんとあり

物たうびは物のたまひけるを延て云詞なりかゝ云は我よりたふとき人なるべしせううこは消息にてもとは人の生死に云詞をうつして安否をとふことなり又うつして文をせううこといひ又たゞ人におとづるゝことにもいふとゝなりぬ

こえぬまはよし野の山の櫻花ひとづてにのみ聞渡る哉

○ソチノ大和ノ國ヘマダコエテイカヌウチハ。見タイ〳〵ト思フ吉野山ノ花ヲ。人ノハナシニバカリ聞テクラス　ヤウナモノデ。大和ニゴザルオマヘノコヲ。ワシガッチ〳〵戀シウ思フノモ。ソノトホリザヤアシンキナコカナ

初句は。あはぬまはといふ意にいへるにはあらず。

やよひばかりにものゝたうびける人のもとに又人まかりてせうそこすときゝてよみてつかはしける

露ならぬ心を花よおきそめて風ふくごとよ物おもひそつく

○花ニハ露ガオクモノデヤガ。ソノ露デハナイワシガ心ヲ。オマヘノ花ニオキソメテサルコエニ。風ノ吹クタビニ。花ガヨソヘチラウカトソコヘ心ガツイテ。思ヒコトガゴザル。ドウカヨソヘチリソウナウハサモ。チラトウケタマハッタゾエ

題しらず　坂上これのり

我戀はくらふの山の櫻花まなくちるとも數はまさらじ

○暗部山ノ櫻花ノサイチウトヒマモナシニチル數ハオビタヽシイコデアラウケレモ。ワシガシゲウ思フ數ニクラベタナラマサリハスマイ

冬川のうへはこほれる我なれや下にながれて戀わたるらん　むねをかのおほより

○ワシハ。ウハッラノ氷ッテアル冬ノ川デヤヤラシテ。其氷リノ下ヲ水ノ流ルヤウニ。外ヘハアラハサズニ。心ノ内デ。長月日ヲ戀シウ思フテタヾル　たゞみね

山の名をくらぶるにいひかけしのみ

ふゆがはとにこりてよむ

上は浮たるといはん序なり

後撰にから衣かけてたのまぬ時うなき人のつまとは思ふものから中〻におもひかけてはからころも身になれぬをうらむべきかな

しきたへは枕詞なり

濁たきつせにねざしとゞめぬうき草の浮たる戀も我はするゝな

○早イ川ノ瀬ニアル浮草ノ根モトノ。底ヘツカズニウイテアルヤウニ。

ワシハウイタ戀ヲマアスルコカナ

ともの里

よひ〳〵にぬぎて我ぬるかり衣かけて思はぬ時のまもなし

○上心ニカヽツテカタ時ノマモ思ハヌコハナイ。○千秋云。ぬきてわがぬるは。ぬるとてわかぬゞといふ意なり

東路のさやの中山なか〳〵に何しか人をおもひそめけん

○アハレモセヌ人ヲ思ナマナカニ。ナセニ此ノヤウニワシハ思ヒソメタコヤラ

しきたへの枕の下に海はあれど人を見るめはおひずぞありける

○枕ノ下ニ涙ノ海ハアルケレド。戀シイ人ヲ見ルメハナ。ハエヌコヤラ

ワイ

年をへてきえぬ思ひはありながらよるの袂はおほこほりけり

○何ン年カキエズニモエル思ヒノ火ハアリナガラモ。夜ル〳〵ソレデモヤッパリ袖ハナミダガ氷ルワイ。思ヒノ火デトケサウナモノヂヤコ

つらゆき

我戀はしらぬ山路にあらなくにまどふ心ぞわびしかりける

○シラヌ山道コソマヨウモノナレ。ワシガ戀ハシラヌ山道デモナイニ。此ヤウニマヨウ心ハナ。ツライナンギナコヂヤワイ

くれなゐのふり出つゝなく涙には袂のみこそ色まさりけ

家集には三の句あらねども六帖には下の句などか心のまどひけぬべきとあり

家集には末の句なり
ぬべらなりとあり

れ

○壁ヲアゲテ泣ク血ノ涙ノ紅ハ。ソメルタビニ。袖バッカリガサ。色ガマスワイッチニ紅デ衣ヲ染ルノハドコモカモ同ジヤウニコソ染メルモノナレ。此ヤウニ袖バカリ染メルモノデハナイニサ。初二句。夏の部に。からくれなゐのふり出てぞあく。とあるとは意異なり。この歌にては。紅といふに用あり。ふり出は紅をふり出て染ることを。聲をあげてあく事にかねたり。餘材四の句の説わろし。

白玉と見えし涙も年ふればからくれなゐにうつろひにけり

○始メノホドハ白イ玉ノヤウニ見エタ涙モタンタント年ガヘレバマッカイニ。色ガカハッタワイ

みつね

夏虫を何かいひけん心からわれも思ひにもえぬべらな

上は序にいひて絶てつれなきと云なり

今の歌拾遺にふたたび入て四の句おもはぬ人もとあり
六帖には相思はぬと云題に入る

り

○夏虫ノ火ノ中ヘハイッテ心カラ身ヲモヤシテシマウワチ。エ、ハカナイオロカナワザヤトハナセニ云タワヤラ。夏虫バカリデハナイ。オレモ其通リニ心カラ思ヒニ身ヲシテノケルデアラウヤウニ思ハル、

たゞみね

風ふけば峰にわかるゝ白雲のたえてつれなき君がこゝろか

○上サテ〳〵ルサモナイ。ケシカラヌキヅヨイ。君ガ心カナ

月かげに我身をかふる物ならばつれなき人もあはれとや見ん

○月チバ。惣体。人ガアヽハレト思フテ見ルモノヂヤワガ。ワシガ身ヲ月ニカヘラルヽモノナラ。カハッテ月ニナッテ見タイ。ソシタラッレナイ人モ見テ。アヽハレカ。アイヤト思フテクレルデモアラウカイ。餘材。

影といふに心をつけたる詞わろし。月かげは。たゞ月あり。

こひ志なばたが名はたゝじよの中のつねなき物といひはなすとも　ふかやぶ

○ワシガモシ此通デ戀死ンダナラバ。ツレナイ人ハ。深養父ハッワイヤ。ワシユエニ死ンダトハイハズニ。タヾ一通リニ世中ガ無常ナ物デ死ンダヤウニ云ヒナシテオクデガナアラウガ。タトヒサウハイヒナスに世間ノ人ハヨウ知テ居レバ。外ノ事デ死ダトハ云マイ。君ユエニ死ダト云ヒフラシテ君ガ名ハ立ツテアラウ

津の國の難波のあしのめもはるに志げき我戀人志るらめや　貫之

○難波ノ蘆ノハルカニ見エル所マデ。ビッシリトシゲウハニテアル如クニシゲイ此ワシガ戀ヲ思フ人ハカウトハ知ウカイ。コレホドニアラウトハ知ルマイ。めもはるにといへるは。たゞ見渡しのはるかなる意のみなり。蘆の芽又張ル春あゞの意はなし

手もふれで月日へにける志らき弓おきふしよるはいこそねられね

○弓ヲ久シウ手モサヘズニオクヤウニ。思フ人ニ久シウアハヂバ。其人ノコトバッカリ思フテ。夜ルハヂタリオキタリシテ。ヨノメモヤテラレヌワイノ

人志れぬ思のみこそわびしけれわが歎きをば我のみぞしる

○思フ人ニ知ラレヌ戀ホドヤ。ナンギナコマッタモノハナイ。此ワシガ歎クノヲバ。ワシバッカリガサ知テサテ。ソノ思フ人ハヂカラシラズギヤ

とものり

弓におきふしと云ふはいにしへの弓射るさまは今とたがへり左のわきまで引ふせてひきはなちおこしなどせしよりゆみにおきふしのことをよめるが古歌に多し

家集にむかし物などいひし女のなくなりしかばあか時がたの夢に見はて待らでさめ待りにしかばとありて今の歌あり

とに出でいはぬばかりぞみなせ河まだに通ひて戀しき物を

○ワシガ戀ハテウド。水無瀬川ノウハベハ水ノナイヤウニ見エテ。下ノ方ヲ水ガトホテ流レルヤウナモノデ。詞ニダシテイハヌト云フバカリヂヤゾイ。心ハジヤウヂウ思フ人ノトコヘ通ウテ戀シイモノヲ

みつね

君をのみ思ひねにねし夢なればわが心から見つるなりけり

○オマヘノフバッカリヲ思ウテ寢テ見タ夢ナレバ。逢ウト見タノモオマヘノナサケデハナイ。ワシガ心カラ見タノヂヤワイ

たゞみね

命にもまさりてをしくある物は見はてぬ夢のさむるなりけり

是は弓を引は我方に本末のよるものなればよるに夜を云とかけて上は序なり

新撰万葉にこひわび

○イノチホド惜イ物ハナイヂヤガ。ソレヨリマダ惜ウ思ハレルモノハ戀シイ人ニ逢ウト見ル夢ノマダトクト見テシマハヌウチニ早ウサメルノヂヤワイ

はるみちのつらき

あづさ弓ひけば本末わかぬたによるこそまされ戀の心は

○畫ヨリモ夜ルガサカクベツニ戀シウ思フ心ハマサルワイ

みつね

我戀はゆくへも知らずはてもなしあふをかぎりと思ふばかりぞ

○ワシガ戀ハタトヘテイハヾ道ヲイクフヤラサキモシレズ。ドコマデトモ云カギリモナイヤウナモノデドウナルフヤラヲカラサキノシレヌフデ。タヾアウノヲイキドマリト思フバカリデヤ

われのみぞかなしかりける彦星もあはで過せる年しな

ぬ天の河原へゆきしかわたる彦星ありといふなり

この歌後撰にひさしくいひわたり待りけるにつれなくのみ待りければなりひらの朝臣とて伊勢が返しありこは枇杷左太臣仲平公の官位ひくき時の歌にてなかひらの朝臣とかな書したらんをなりひらにうつしなせしものよ業平と伊勢と時代かなはずこの贈答も伊せが集に入て枇杷殿なりさて枇杷殿は躬恒と時を同じうするをこの集に躬恒が歌とくて入しといとも不審なりことにいせが返し歌もあればかへすゞ〳〵いぶかしきとなり

ければ

○世ノ中ニオレホド。カナシイモノハナイワイノ。彦星ノ戀ガ一年ニタツタ一度ツヽナラデハアハレチバ。カナシイヤウナモノナレド。ソレモ年ニ一度ヅヽハチガヒナシニ逢ウヿガアッテ。一年モアハズニスギタ年ハナケレバ。ワシホドニカナシイ戀デハナイハッテ

ふかやぶ

今はゝや戀ゝなをしをあい見んと頼めしとぞ命なりける

モウハヤ今ゴロハ。戀死ンデシマウデアラウニイッヅヤ逢ハウト。アチラカラ約束シテオイタヿガアルヿ頼ミニシテ。ソレバッカリガ命デマダカウ生テ居ルワイノ

みつね

たのめつゝあはで年ふるいつはりにこりぬ心を人はさらなん

○イク度カ〳〵。逢ハウト約束シテ頼ミニサセテオイテハ。アハズニ何ン年カタツ。ダマシゴトニコリズニヤッパリタノミニ思フワシガ心底ノ深イトコロヿ推量シテグレカシ

とものり

いのちやは何ぞは露のあだ物をあぶにしかへばをしからなくに

合ガサ何ンヂヤヅイ。ホンノツユノヤウナアダナモノヂヤモノ。逢フニカヘテナラ。コノイノチシマウノハヂシイヿハナイ

頭書 古今和歌集遠鏡卷之十二終

物ちのちはなどゝいふに同じく助けながら他をもかね又はうのとゝをさたかにいはぬにも用ふ詞なり

頂書

古今和歌集遠鏡巻之十三

戀歌三

やよひのつゐたちより志のびに人にものいひてゝ後に雨のそぼふりけるによみてつかはしける

在原ノ業平朝臣

おきもせずねもせでよるをあかしてははるの物とてながめくらしつ

○オキルデモナシニルデモナシニ。ウツラ〳〵トシテ夜ヲアカシテハ。又晝ニナレバ。此ゴロノ空ノヤウニ。長雨ハ春ノモノデ一日ナガメテ。シンキニ思フテクラスザヤ

なりひらの朝臣の家に侍ける女のもとによみてつかはしける

これも長雨に物思ひのながめをかねたり

つれ〴〵のながめにまさる涙川そでのみぬれてあふよしもなし　とし行ノ朝臣

○ウチツヾイテ日ヨリハワルシ。日ハ長シヒマデサビシイニツケテハ。イヨイヨシンキデナガメチシテ。涙ノ川ノ水ガマシテ。袖ガヌレルバツカリデソシテ川ノ水ガマセバ渡ラレヌヤウニ。逢ハレサウナモヨウモナイ。

かの女にかはりてかへしによめる　なりひらの朝臣

淺みこそ袖はひづらめなみだ河身さへ流るゝと聞ばたのまん

袖ガヌレルトオッシヤルガ。ソレヤオマヘノ涙川ガ淺ッニッサウデアラウソデバッカリ。ヌレルグラヰノ淺イコデハ。頼ミニナリマセヌ。身マデガ流レルトオッシヤルクラヰ涙川ノ深サナラ。ソレデハ頼ミニ致シマセウ。餘材打聞。四の句の訛わろし。身さへながるとは。たゞ袖のみひづるにむかへて。深きことをいへるのみなり。たとへたる意はなし。

題しらず　よみ人しらず

よるべなみ身をこそ遠くへだてつれ心は君が影となりにき

近ウヨルテスヂガナサニ。身コソカウシテ遠ウヘダテ、居レ。心ハヤウヂウオマヘノソバチハナレハセヌ。影ノヤウニドウカラ心ハオマヘニツウテ居ル。餘材に。古はよるといふとを。よるべといへり。といへるはひがとなり。さるとあし。引たる万葉の歌のべは。可の意なるを。心得ぬやまれるなり。

いたづらに行ては來ぬる物ゆゑに見まくほしさにいざなはれつゝ

よるべは客方なりなみはなゝしてなり

物故には物ながらになり此歌いせ物がたりにては例のつゝり

となれば難なし六帖に人まろの歌とせしはいぶかし

是もとるべからず詞づかひしらべのさま人まろには似もつかぬものゞ上の句歌といはで有下はなみだをいはで涙をしらせたり

行テハムダニカヘッテクルモノヽクセニ。逢ヒタイト思フ心ニサソハレテハ又シテモイキ〳〵スルワイ。ドウ云テモトカク逢ヒタサニサ

あはぬ夜のふるさら雪と積りなば我さへともにけぬべき物を

雪ノツモルヤウニ逢ハヌ夜ガイク夜モ〳〵ツモッタラ。ソノ雪ノキエルヤウニワシマデガトモニ消ルデアラウト思ハレルモノヲ。サテモアハレヌフカナ

此歌はある人のいはく柿本ノ人まろが歌なり

なりひらの朝臣

秋の野に篠分しあさの袖よりもあはでこしよぞひぢまさりける

○秋ノ野デ笹ノ中ヲ分テトホッテキタ朝ノ袖ハキッウ露デヌレルモノヂヤガソレヨリモ思フ人ノ所ヘイテ。エアハズニモドッキタ夜ガ。ナホ

かれなでは別なでの上畧なりこゝにては絶すといふほどのことに聞べし

キッウ涙デ袖ガヌレルワイ

小野ノ小町

見るめなき我身をうらと知らねばやかれなであまのあしたゆくゝる

○海松メノ無イ浦ヂヤト云フテチシラズニ海士ガミルメラ苅ウト。思フテヒタモノ來ルヤウニ。アノ御人ハワシガ身ヲ。ドウモ逢ハレヌ身ヂヤトハ知ラシヤラヌカシテ。一夜モカヽサズニ来ノダルイニ。毎夜〳〵逢ウト思フテ見エル。トテモアハレハセヌノニサ

初二句の意。むかしより說得たる人あし。是は春がけてなれどもいまだ雪はふりつゝといへる類にて。詞を下上に打かへして心得べき格あり。我身を見るめなき浦としらねばやといふとあり。見るめなき浦とは。逢かたき身といふ意あり。浦はたゞ見るめによれる詞のみあり。されば我身をうらむとも。うしともいひかけたるにはあらず。さて後にわが身の

うらとよめる歌多きは。この歌の詞によれるものあり。

あはずしてこよひあけなば春の日の長くや人をつらしと思はん　源ノ宗千朝臣

○今夜ハ、ゼヒトモドウアッテモト思フタニ。又トウ〳〵エアハズニアカスヂヤサウナ。今夜アハイデハモウ逢ウベキ時節ハナイニ。此トホリデエアハズニ夜ガアケタナラ。春ノ此ノ日ノ長イノコシンキニ思ヒクラシテ。四イツマデモツライ人ヤ〳〵ト思フテ一生ヲタテルデガナアラウ

有明のつれなく見えし別れより暁ばかりうきものはなし　みぶのたゞみね

○マヘカタ女ト暁ニ別レタトキニ。有明ノ月ヲ見タレバ。シキリニアハレナモヨホシテ。ア、月ハ夜ノアケルモシラヌカホデ。アノヤウニヂツトユルリトシテアルニオレハ夜ガアケレバ。カヘラヂバナラヌコトヲ。ノコリ多イトコロヲ別レルコトカナト。身ニシミ〴〵ト思ハレタガ。其ノ時カラシテ。ヨニ暁ホドウツライモノハナイヤウニ思フ

餘材に上句を。あはずしてかへる意とせるは。歌の入りどころにおづめるひがとあり。顕注の如く。逢ヒてわかれたるあり。然るをこゝに入れたるは。ふにところをあやまれるあり。六帖もこの集によりてあやまれり。

ありはらのもとかた

あふとのなぎさにしよる波なればうらみてのみぞ立かへりける

○浦ノ磯バタヘヨッテクル浪ノ。ヂキニ引テ沖ノ方ヘカヘルヤウニ。逢ヒモナイ人ノ所ヘイクワシナレバ。イツデモソノ人ヲ恨ンデバッカリヤカヘルワイ

よみ人しらず

こは渚に無きをかけてみな波の縁もてつゞけたり且ツ波はわれによりへていふなり

これは風に先だつ名とつゞくるに涙といへり

上は名をとりてといはん料なりとるとは我におふ心なり日本紀に頁の字をとるとよめり名を頁は名をとるといふに同じきおもへ

かねてより風にさきたつ波なれやあふてなぎにまだき立つらん

○マダ逢フタフモナイサキカラ。早ウ名ノタツノハ。云テ見ヤウナラ涙ハ風ノ吹クニヨッテタツモノヂヤニ。マダ風ノフカヌサキニマヘカタカラ。ナギニ涙ノ立ツヤウナ物カシラヌ。ナゼコノヤウニマダ早ウカラ名ノタツコトヤラ

たゞみね

みちのくにありといふなる名取川なき名とりてはくるしかりけり

○上ナイフヲ云ヒ立ヲテ。名ヲタテラレテハ。メイワクナコトヂヤワイ

みはらのありすけ

あやなくてまだき名の立田河渡らでやまん物ならなくに

後撰集には大つぶねに物のたゞびっかはしけるを更に聖入れざりければつかはしける元良親王大かたはなぞやわが名のをしからんむかしのつまと人にかたらん返し大つぶね在原棟梁ノ女とありて今の歌あり元方も大つふねもともに棟梁の子なれば此集には元方の姉とか妹とかありつらんを文字の落たるをうつしつたへしならん

こりずまはこりずまひといふ詞なるべし

○マダ早ウカラ此ノヤウニ名ノタツハ。ワケノタヽヌフデヤトテモカウ名ガタツタカラニハ。ドウシテナリトモ。逢ズニオカウモノデハナイ

もとかた

人はいざ我はなき名のをしければむかしも今もしらず

とをいはん

○人ハドウアルカ。ワシハナイフヲ云タテラレル名ガ惜ケレハ。マヘ方モ今モソンナコトハシリマセヌトハ云ハウ

よみ人しらず

こりずまに又もなき名は立ぬべし人にくからぬよにしすまへば

○マヘカタモナイフヲ。云ヒ立ラレテ。メイワクシタフガアッタガ。ソレニコリモセズニ又ドウヤラ。名ヲタテラレウヤウニ思ハレル。世ノ中ノナラヒデニクウナイ人ガアルデヲ

一度こりたることはすまじき事なるを又もすまじてするといふとすべし
まふはかた人にまけじ心してすまふなり

人しれぬは人にしらせぬの約めなるべし又知られぬともいふべし

ひむかしの五條わたりに人を志りおきてまかりかよひけり志のびなるところなりければかどよりもいらでかきのくづれよりかよひけるをたびかさなりければあるじきゝつけてかの道によごとに人をふせてまもらすればいきけれどなほあはでのみかへりよみてやりける

なりひらの朝臣

人志れぬわが通ひぢの關守はよひ〳〵ごとにうちもねなん

○人ニシラサヌオレガ通ヒミチノ關所ノ番ハドウゾ毎夜〳〵ヨヒ〳〵ニナヨツトナリヒチムツテクレカシ。ソシタラソノ間ニハイラウニ

題志らず

つらゆき

志のぶれど戀しき時はあし引の山より月のいでゝころくれ

○ズイブンカクレシノブケレドモ。キツウ戀シイトキニハ。エコラズニ月ガ出テヨウ見エルノニ。此ノヤウニ出テサクルワイ。又三四ノ句は。たゞ出ての序のみともすべし

よみ人志らず

こひ〳〵てまれにこよひはあふ坂の夕つけ鳥は鳴ずもあらなん

○ハラ一パイ戀〳〵テタマ〳〵コヨヒ始メテ逢フタコ。ドウゾ今夜ハ庭鳥ハマアナイテクレチパヨイガ。鳥ガナケバオキテ別レチバナラヌニ

をのゝこまち

秋の夜も名のみなりけりあふといへばとぞともなく明ぬるものを

小町集にはあひとあへばと見えたりあふてへばは逢といへばのつゞめなり

○秋ノ夜ヲ長イモノヂヤト云モ名バカリヂヤワイ。タマ〳〵戀シイ人ニアウ夜トイヘバ。コレガカウト云フモナシニ。ツイ早ウ明タモノヲナンノ秋ノ夜ガ長カラウゾ

長くとも思ひッはてぬ昔よりあふ人からの秋の夜なれば

凡河内ノ躬恒

○秋ノ夜ハ一ッタイ長イモノヂヤケレドモ。アウ人ニヨッテ。秋ノ夜デモ。ミジカウオホエル物ヂヤト。昔カラモ云トホリデ。此ノ節ハ秋テ夜ノ長イ時節ナレドモ。スイタ人ニ逢ッタ夜ヂヤニヨッテ。長イモサドウモ思ヒキハメラレヌ

志のゝめのほがら〳〵とあけゆけばおのがきぬ〴〵なるぞかなしき

よみ人しらず

しのゝめはいなのめと同音にて明行うちのけしきなり

○目ガサメテ。夜ガクワラリット明テクレバ。一ッニナッテチテ居タ二人ノキルモノガ。別々ニナッテ。ワカレルガサカナシイ餘材。きぬ〴〵の説。いさゝかたがへり。面〻とりさるを。きぬぎぬとゝいはず。千秋云。結句。顯注本に。きるぞかあしきとあるぞ。よろしかるべき。おるぞは。かたやかならず聞ゆ。密勘に。又書寫のあやまりにやとのたまへるは。きるぞのこと歟。おるぞのこと歟。

あけぬとて今はの心つくからになどいひしらぬ思ひふらん

藤原國經ノ朝臣

○夜ガアケタト云テ。サアモウ別レルヂヤト思フ心ガツクカラシテ。ナゼニ此ノヤウニイフニイハレヌ思ヒガソフコトヂヤヤラ

寛平ノ御時きさいの宮の歌合の歌

あけぬとてかへる道にはてきたれてあめも涙もふりろ

とし行ノ朝臣

六帖には閑院ノ大臣の歌とす閑院大臣は時平公なり

いひしらぬは詞もなきほどの思ひがろふなり

こきたれはこきおろすがごとき事に云

花ときちらし稻こきたれなど云たればおろすといふ心なり

六帖にには鳥にあらぬねにても間なんあけぬるとをわれ鳴しかは

ほちつゝ

○此ヤウニ雨ガツヨウフルノニ。夜ガ明タト云テ。別レテ歸ル道デハ。涙モ雨ト同ジヤウニモノヲコキオロスヤウニヒタ〳〵ト落テ。イヨ〳〵ヒツタリトヌレテ。サテモ〳〵カナシイナンギナ〻カナ

題志らず　寵

志のゝめの別れをゝしみわれぞまづ鳥よりさきに鳴はじめつゝ

○目ガサメテ別レルガナゴリヲシサニ。鶏ヨリサキヘワシガサマヅ泣キハジメタ

時鳥夢かうつゝかあさ露のおきてわかれしあかつきのこゑ

よみ人志らず

○目オキテ別レタ曉ニ今鳴イタ郭公ノ聲ハ。聞テモ夢ヂヤカウツゝヂヤカオボエヌ。心ガ亂レテアルニヨツテサ。打聞よろし。よざいわろし

玉くしげあけば君が名たちぬべし夜深てこみを人見けんかも

○日夜ガ明テカラカヘツタナラ。人ガ見テ君ガ名ガタヽウト思フテマタ夜ノ深イウチニ別レテキタカ。ソレデモモシ人ガ見ハセナンダカシラヌ

玉くしげはあけるといふ冠辭なり

けさはしもおきけんかたも志らざりつ思ひいづるぞ消てかなしき

大江千里

○ケサハマア別レニ心ガ亂レテ。ドウシテ起テキタヤラ。チカラオボエナンダガ其ノ事ヲ思ヒダシテ。今サキエルヤウニカナシイ

けさはにてしもは助詞なるを朝霜の置にいひかけてさておき來りけん方も知ざりつるがかへり來りては思ひいづるに消かへるばかり悲しきと云ておもひのひを日に取なして日影に霜

打聞日影の說あれどさまではあらじ

のさゆるをかねたり

業平の伊勢に下向の事たしかなるものに見えずいせ物がたりにいで、狩の使の由にいへどうれもたしかなるよりどころを見ず

人に逢て朝によみてつかはしける　なりひらの朝臣

ねぬる夜の夢をはかなみまどろめばいやはかなにも成まさるかな

○ユフベ逢テ寐タノハ。ドウデアッタヤラ。夢ノヤウデアマリハカナサニ。セメテハホンノ夢ニナリニ。マイチド見ヤウト存ジテ。眠ッテミレドチラレモハ致サヂパ。夢ニサヘエ見イデ。サテモ〳〵イヨ〳〵ハカナイコトニナリマサルコカナ

業平の朝臣いせの國にまかりたりける時齋宮なりける人にいとみろかにあひて又のあしたに人やるすべなくて思ひをりけるあひだに女のもとよりおこせたりける　よみ人しらず

君やこし我や行けんおもほえず夢かうつゝかねてかさめてか

○ユベノ事ハオマヘガワシガ方ヘ御出ナサッタデアッタヤラ。ワシガオマヘノ方ヘ參ッタデアッタヤラ。又夢デアッタカ。ホンマノコトデアッタカ眠ッタ内デアッタカ。目ガサメテ居ルウチノコトデアッタカ。ドウデアッタヤラワシヤチカラ覺エマセヌ。オマエハドウヂヤイナ

かへし　なりひらの朝臣

かきくらす心のやみにまどひにき夢うつゝとは世人さだめよ

○サイナユウベノコハ。イツソ心ガクラカッテ。闇ノ夜ニ道ヂイクヤウデドウデアッタヤラ。ワシモサ一向オボエマセヌ。夢デアッタホンマデアッタト云コハ。世間ノ人定メテクレイ

題しらず　よみ人しらず

をさなゝ世人さいへるがかざりなゝめでたし

六帖に「あし引の山下とほる月かげにあかずも人にあひ見つるかもまた〳〵同歌なるを詞のかはりはりたるなり

難波のみつを見つにかけたる序なり

うば玉のやみのうつゝはさだかなる夢にいくらもまさらざりけり

○闇イノニ。ナヨット逢タノハ。ホンマノコトデモ。タシカナ夢ニ何ホドモマサッタコトハナイワイ。夢ニ見タト同ジクラヰノコデアッタ

さよふけてあまのと渡る月かげにあかずも君を逢見つるかな

○上君ニ逢フテサテモ〳〵セア〳〵ノコリオホカッタコカナ

三の句のには。のゝあやまりにて。上句はあかずの序なるべし。萬葉に例多し。

君が名もわが名もたてじ難波なるみつともいふなあひきとはいはじ

○ドウゾオマヘノ名モワシガ名モタトヌヤウニセウ。ワシニ逢タトオマヘ[ハ]モイハシヤルナ。ワシモオマヘニ逢タト云マイホドニ

名所なり

名取川隆奥の名所なりうもれ木は久しくうづもれたる木なり谷のうもれ木など、もいへり

水の心とは水中と云がごと〳〵さてたゞ云かけしのみなり

ゆめはいましめいさめなど云詞をつゞめたるなり

あひきは難波の縁に。網引にいひよせたるなり

名取川せゝのうもれ木あらはればいかにせんとか逢見うめけん

○上世間ヘシレテ名ガタッタラ。ドウセウト思フテ。逢ヒッメタコヤラ

よし野川水の心はやくとも瀧の音にはたてじとぞそれもふ

○吉野川ノ水ノ早イヤウニ心ニハヤルセナウ思フ[ヒ]。瀧ノヤウニ音ニハタテマイトサワシヤ思フ

戀しくばまたにを思へむらさきの根ずりの衣色にいづなゆめ

○戀シウ思フナラ心ノ内デ思フテ居タガヨイワ。圖色ニダメデハナイワ。カナラズ〳〵

をの〳〵はるかせ

これは下に心のむすぼふれると云フのみさて花すゝきは秘にいでゝこふといひ下ゆふ紐といひて結ふれといふともに冠辭なり古歌にこの体多し

おもひあまりてのうたなり

花すゝきほに出でこひは名を惜み下ゆふ紐のむすぼゝれつゝ

○アラハシテ思フタナラ。名ガタツデアラウトソレガフシサニ。心ノ内デバツカリ思フテ。ムシヤクシヤトシテ。サテモ〳〵苦シイ戀ヲスルヿヂヤ。打聞。下ゆふ紐の説俗たり

たちばなのきよきがもとのびにあひまれりける女のもとよりれてせたりける

よみ人しらず

思ふどちひとり〳〵が戀しなばたれによろへて藤衣きん

カウ思ヒアタドウシノ内ニオマヘカワシカドナラヅ。一人ガ若シヒヨツト戀死ンダナラ。服ヲ着ヤウナレド。表ハレタ夫婦デナケレバ。服ハキニクイヂヤガ。親類ノ内ニ誰ガ死ンダニヨツテキルト云テ。服ハキタモノデアラウヅ　餘材。ひとり〳〵を我事にとれるはわろし。打聞よろし。すべてひとり〳〵といふは。みな俗言にぞちらぞひとりといふ意あり。

かへし

なきこふる涙の袖のうほぢなばぬぎゝへがてらよるこうはきめ

たちばなのきよき

○ナルホドソンナ物ヂヤ。モシワシデモソナタデモドチラヅ戀死ンダ時ニハカナシウテ泣テ戀シタウ涙テ。定メテ袖カキツウヌレルデアラウ。ソシタラヌレタヲヌギカヘガテラコ。夜ルサ服ヲバ着ヤウハサテ。夜ルナライカウタレモ知ルマイホドニ

題しらず

こまち

うつゝにはさもこうあらめ夢にさへ人めをもるゝと見るかわびしさ

人めを守るは人目をはゞかりつゝしむを云

後撰に思ひねのよな〳〵夢に見しことをたゞかた時のうつゝともがな

○ホンマニハサウモアリソナモノヂヤガ。夢ニマデ人目ヲハバカルヤウニ見ルコノナンギヤワイノ

かぎりなき思ひのまゝによるもこん夢路をさへに人はとがめじ

○カギリモナイホド思フコノ心ニマカセテ。セメテ夢ニナリトモセイダシテ行テ逢ハウ。ホンマニ通フハカクベツノコト。夢ニ通フ道マデヲ。人ハ見トガメハスマイホトニ

よるもは夢にありともの意あり下に夢路といへる故に。詞をかへてよるとはいへり。こんはゆかんの意あり。この例つねにおほし。

夢路にはあしもやすめず通へどもうつゝに一めみしでとはあらず

○夢ニハ足モヤスメズニ。毎夜セイダシテ通フテ。タビ〳〵逢フト見ルケレドモ。ソレデモイツヂヤ。チヨツトホンマニ逢タヤウニハナイア

後撰に故郷をかはと見つゝもわたるかな淵せありとはむべもいひけん又枕の草子にくゞれよるいもせの山の中なればさらによしのゝかはとだに見しと云もかれはとも見じの心なり

ゞ夢ハヤクニタヽズモノヂヤ

よみ人しらず

思へども人めつゝみの高ければ川と見ながらにこうわたらね

○戀シウ思フ人ヲ見テハ。アヽアレハト思ヒナガラモ。人目ヲツヽム心ガイツハイヂヤニヨツテドウモヨウヲアハヌワイ

四の句。かれはといふとを。川にいひよせたり。

瀧つ瀬のはやき心をなにしにも人めつゝみのせきとゞむらん

○早イ川瀬ノヤウニヤルセモナフ思フ心ヂヤモノヲドウ云フデマア。堤デ川ノ水ヲセキトメルヤウニ。人目ヲツヽンデ。此ヤウニコラヘ忍ンデクルシイメヲスルヲヤラ

寛平御時きさいの宮の歌合のうた

かくれぬは蘆羽にて草など生しげりたる沼なり

後撰にふたゝび入て四の句下にかよはんとあり

きのとものり

くれなゐの色にはいでじかくれぬの志たにかよひて戀はしぬとも

○三此ヤウニ心ノ内デバッカリ思フテ居テ。ダトヒ戀死スルト云テモ二色ニハダスマイ。餘材打聞ともに。下に通ひてを。たかひの心といへるは。わろしかよひとは。たゝ沼水の緣の詞にていへるのみにて。歌の意はたゝ下に思ふとあり。

題志らず　みつね

冬の池に住にほ鳥のつれもなくうこに通ふと人に志らすな

○四其所ノ家ヘワシガ通フト云フテ人ニシラスデハナイヅ

餘材つれもなくの注わろし。上の句は序にて。四の句のそこは。序よりは。底をつゞきたり。つれもなくは。氷の下をかよふ。故に。上へはさも見えぬよしあり。此詞は序のうへのとのみにて。歌の意にはあづからず。

六帖にはおきゐる霜のさむければとありしみつゝともは染つくなり

さゝの葉にれく初霜の夜を寒みはつくとも色に出めや

○征ノ葉ヘフッタ霜ガ。夜ノ寒サニ。シミツクヤウニ。ワシガ戀心モ。シミツクヤウニハ思フト云テモ。色ニダサウカイ。ドノヤウニアッテモ色ニハダスマイデハナイ

音にだには音にもといふが如しだにといふ詞をかろく意得べし

よみ人志らず

山志なの音羽の山のれとにだにひとの志るべくわがこひめかも

○ナンボ戀シウ忠ウトテモ三音ニモ人ノシルヤウナフリヲセウカ。マアソノキヅカヒハナイヅイナ

此歌ある人あふみのうねゝのとなん申す

しら川はいにしへは鴨川の上をいへり

万葉にいきのをに思へばくるし玉の緒のたえてみだれなしらばしるとも

きよはらのふかやぶ

みつしほの流れひる間を逢がたみみるめの浦によるをこうまて

○一[illegible]畫ノ間タカ逢ガタサニ回夜ルチヤワシハ待ツワイ

平貞文

白川のまらずともいはじ底きよみ流てよゝにすまんと思へば

○人ガ問フタラ一シラヌトモイハウナレドサウハ云マイ。オレヤ真實ナ心底ヂヤカラハ。四イツマデモ末長ウツレソハウト思フ料簡ナレバサスレヤソノヤウニナニモ人ニカクスコデハナイワサテ

とものり

またふのみこふればくるし玉のをのたえてみだれん人なとがめそ

○ナイセウデバツカリ思フテ居レバキツウシユツナイニモウシモイツソウチダシテ三[illegible]ミダレウ。ソシタラ人ノ目ニカヽルデアラウカ。必ズタレモトガメテ。下サルナヤ。

我戀を忍びかねてばあし引の山たちばなの色に出ぬべし

○ワシガ此思ヒヲ。今マデハマアドウヤラカウヤラ。忍ビカクシテ居ルガ。コレカラモウドウモコタヘラレヌヤウニナツタナラバ。四色ニデヽ人ノ目ニモカヽルヤウニナルデアラウト思ハレル

よみ人まらず

大かたは我名もみなとこさ出なんよをうみべたに見るめすくなし

○磯バタハ海松メガスクナヤニ。舟ヲ漕カラ沖ヘズツトコギ出シテ。存分ニミルメヲ苅ルヤウニ。ワシガ中モ。大ガイナコトナラ。モウ名ノ立ツ

山たちばなは髪ろぎの時山すげにろふる草なり今はやぶからじとよぶものなり

ニカマバズニ。世間ヘハツトウナ出シテシマハウ。隠シ忍ブ中ハ。思フヤウニ度々モアハレヌガ。イカニシテモウイコトヂヤホドニ餘材打聞。よをうみの說わろし。世は男汝の中をいへるにて。忍ぶ中をうく思ふよしあり。又餘材船の名のさだ用あし。

枕より又ぞ人もなき戀を涙せきあへずもらしつるか

平貞文

枕は耳ちかきものゆゑに間といふとにていふ歟これらはいづれにもあれ大方戀をすれば枕はもはら知るべきものといふべし

○ワシガ戀ヲバ。枕ハトウカラモ知ッテサタニモアラウガ。枕ヨリ外ニハ又ト知ル人モナカッタニ。涙ヲドウモエセキトメイデ。ツイトリハヅシテ。モラシテノケタワイ。サテモ〳〵ツライコトシタコカナ。

よみ人しらず

風ふけば涙うつ岸の松あれやねにあらはれてなきぬべなり

ねにあらはれてと言へる上は序なり

○風ガ吹テ涙ノウチヨセル岸ノ松ハ根ガアラハレルモノヂヤガ。ワシガ戀モソンナモノカシテ。ドウヤラチニアラハレテ。泣キサウニ思ハルヽ。ドウモコタエラレヂバヮ。カウ云フタバカリデハ。聞エマイガ。發チアゲテ泣ケヨチ歌デハチニ顯レルト云ニヨッテ。

この注例のとうり六帖に松の歌に入て涙こす磯のうなれ松とありて作者人まろとあるせりともにあやまれり

此歌はある人のいはくかきのもとの人まろなり

池よすむ名をくし鳥の水を淺みかくるとすれど顯れにけり

○池ニ住デアル鴛ノ。底ヘカクレルト思ヘド。水ガ淺サニ。アラハレテ見エルヤウニワシガ戀モ。ウキ名ノタッチ惜ウ思フテ。隨分トカクシ忍ブヤウニスルケレド。ゼヒモナイコトハ人ガ知タワイ

あふことは玉のをばかり名のたつにより野の川の瀧つせのごと

ことなしぶとはことなしぶりにて事も無げにいひなすなり

六帖に君が名もわが名もおなじとて霞の歌に入たり
野にも山にもとは世にあまねくたつと云

○玉チツナグ緒ハズンド細イヒヨワイワヅカナ物ヂヤガ。ソシガ中モ逢フコトハテウドツノ玉ノ緒クラサノワヅカナコデ。ソシテ名ノタツコハ吉野川ノ瀧ノ音ノ高イグラサデ。ソレハ〳〵ヤカマシイコヂヤワイノ

むく鳥のたちにし我名今さらにとなしふとも逢るしあらめや

○曰一トタビ立ツ名ハ。モウドウモゼヒガナイ。今サラワシヤソンナコハナイト云ヒワケシタトテモ。ヤクニタヽウカイ。ナンノヤクニタヽヌコヂヤ

ことあしふの注。打聞よろし。餘材わろし。

君により我名は花にはる霞野にも山にも立みちにけり

○君ユエニワシガウキ名ハテウド野ヤ山ノ花ニ霞ガイチメンニタツヤウニドコカラドコマデ。知ラヌ人モナイヤウニナツタワイノ。花ニ霞ノタツハツライモノデヤガ。ウキ名ノ立ツタモ同シコデ。サテモツライコヂヤ

花にといへる意の説。餘材打聞ともにわろし。

伊勢

立るといへば枕だにせでねし物をちりならぬ名の空に立らん

○ナンボカクス。戀デモ枕ハヨウ知ルト云コヂヤニヨツテ。ワシヤ枕サヘセズニ。寐タモノヲ。誰ガマア知テ。ウキ名ガハツト高ウ立ツタコヂヤヤラ。塵チリコツ空ヘハツトタツモノナレ。塵テモナイウキ名ガサマア

こゝろにてかゝよりつゝけたり

空にたつらんはなき名のたつにはあらずもとよりうのことのありて名のたかく立をいへりなき名と云説はあしゝ此篇次なき名にあらず

頭書 古今和歌集遠鏡卷之十三 終

かつ見るといはん序のみかつ見るとはかつがつあひ見る人なり

あさかの沼は安積郡にありあさか山も同所なりといへり

頭書 古今和歌集遠鏡巻之十四

戀歌四

題しらず　　よみ人しらず

みちのくの淺積の沼の花がつみかつ見る人に戀やわたらん

○上カツ〳〵ニチヨツトカウ逢タバカリノ人ヲ。コレカライツマデモ戀シウ思ウテ月日ヲタテルコデアラウカイ清

逢見ずば戀しきともなからまし音にぞ人を聞べかりける

○一度モ逢タコガナクバ此ノヤウニ戀シイコモアルマイ。アフタコガナクバタヽヨソノコトニ聞テ居ルバカリデ*アラウニト思ハルヽ

つらゆき

上はなか〳〵にといばん序なり
いろのかみふるは大和の山邊郡なり中道はうこの中にある道なり

いろのかみふるの中道なか〳〵に見ずは戀しと おもはましやは

○目ナマナカニ一度モ逢タヿガナクバ此ノヤウニ戀シイトハ思モハウカイコノヤウニハ思フマイニ

この歌友則集に見えたり

藤原のたゞゆき

君といへば見まれ見ずまれふじのねのめづらしけなくもゆる我戀

○富士ノ山ノモエルノハジヤウヂウノヿデ。メヅラシイヿモナイガ。ワシモオマヘノヿトサヘイヘバ。逢テモアハイデモ。イツデモフジノ山ノヤウニ戀ノ思ヒガモエマス

女の歌にはいと用意ありてやさしきなり朝とにといふにて鏡といはでもとわりつくせり

伊勢

夢にだに見ゆとはみねじ朝な〳〵わがおもかげにはづる身なれば

石間とよむべからずいはまとよむが古語なり

上は序なり見るめにわが思ふ人にあひ見るをよせてあくまでにもがなと願ふなり

よみ人しらず

石間ゆく水のしら波立かへりかくこそは見めあかずもあるかな

○ソシヤモウ思フ人ノ夢ニモ見エルトハ見ラレマイゾ。朝々鏡ヲ見ルニモキツウヤツレタオモカケデ。ハヅカシイ身ヂヤニヨツテッ

○目ドウゾ又ヒツカヘシテ來テ此通リニッアハウワイ。サテモ〳〵マアノコリオホイヿカナ

いせのあまの朝な夕なにかづくてふ見るめに人をあくよしも哉

○目ドウゾ〳〵思フ人ニ存分ニハラッパイ。逢ハレルヤウニシタイ朝ゑ夕ゑハ。朝食の菜。夕食の菜ぞ。魚類をもおといふ。菜と同意あり。此ノ歌おどの朝ゑ夕ゑを。たゞ朝夕のことと見るはひがとぞ

とものり

わりなきはとわりなきものにおるふとなり

春霞たなびく山のさくら花見れどもあかぬ君にもあるかな

○ガスミノタナビイテアル山ノ櫻花ヲ見ルヤウデ。見テモ〳〵逢テモ〳〵サテモマアアカヌ君ヂヤコトカナ

心をぞわりなきものとおもひぬる見るものからや戀しかるべき

ふかやぶ

○心ト云モノハ。ムリナコトヲ思フモノヂヤトサ思ハレル。カウシテ逢テ居ナガラモヤツハリ戀シイワイ。逢テ居ナガラ戀シカラウハズカイ。逢テ居テハ。戀シカラウハズハナイニ

かれはてん後をばしらで夏草のふかくも人のおもほゆるかな

凡河内ノみつね

ある人のいはゝ下にあるきのふのふちはけふの瀬になると云をとれるなりとうめてんはうめたらんのつゞめなり

○夏シゲル草モ。冬ハノコラズ枯レルモノヂヤガ。ワシガ思フ人モ。今コソアレ。後ニハカレテ。遠ノイテシマウデアラウニ。サウ云フコトヲバガテンセズニサテモ〳〵。夏草ノヤウニ深フ思ハレルコトカナ

飛鳥川ふちは瀬になる世なりともおもひわすれじ

よみ人しらず

○アスカ川ハ淵瀬ガヨウカハルト云フテ。世間ノ人ノ心モソンナ物ヂヤト云フコトヂヤガ。タトヒソノヤウナ世ノ中ヂヤトテモ。ワシハ一トタビ思ヒソメテアラウ人ヲバイツマデモ。忘レハスマイ

寛平ノ御時きさいの宮の歌合のうた

思ふてふ言の葉のみや秋をへて色もかはらぬ物にはあるらん

○ソウタイ木デモ草デモ。秋ハ色ガカハルモノヂヤガ。秋ヲコシテモ。色

さむしろは延喜式にも見えて狭席はせまくみじかきむしろなりされどもかくよむはうれまでもなくさは猥語にてたゞむしろのことに心得べし

ノカハラヌモノハ。ワシガオマヘヲ思ウト云此ノ詞バカリデカナアラウ。何ハカハルト云テモ。此フシガ詞バツカリハカハリハセヌソエ

打聞わろし

題しらず

さむしろに衣かたしきこよひもや我をまつらん宇治のはし姫

○今夜モ帶ヲトイテ。フトンノ上ヘキルモノハ片一方ヲシキテ。我ヲ待テ居ルデカナアラウ。宇治ノ橋姫ガ。打聞はし姫の説いかゞ

又ハうぢのたまひめ

君やこん我やゆかんのいさよひに眞木の板戸もさゝずねにけり

○君ガクルデアラウカ。ワシガ行ウカト。シバラク見合セテ居タデ。戸モサヽズニヲタワイ

あり明月は十五夜より後をいへどかやうに待わびたらんハ廿日より後の月なるべし

万葉にわが宿に梅さきたりとつけやればこちふに似たりちりぬとぞよし

今こんといひしばかりに長月のあり明の月を待いでつる哉

うせいほうし

○オツヽケソレヘ參ラウト云テオコシタバツカリニ。此ノ九月ノ末ノ夜ノ長イニ。サテマツホドニ〳〵。オソウ有明ノ月ガハヤモウ出タワイ。約束モセナンダ有明ノ月サヘ待チダシタニ。ソレニサ待ツ人ハサテモサテモ來ヌコカナ。コレハマアドウシタコヾ

月夜よし夜よしと人につげやらばこてふにたゞり待ずしもあらず

よみ人しらず

○今夜ハキツウ月ガヨウゴザル月ガヨウゴザルト人ノ所ヘシラセテヤツタラ。ソレデハチトゴザレト云テヤルモ同ジヤウナモノヂヤ。ドレヤシラセテヤラウ。オレモアマリヨイ月ヂヤニヨツテ。モシワセモセウカト

一説にこむらさきハ濃紫なり
和名鈔に髪を毛度由比といへれば即髪をもて元を結をもいひ又糸もてゆふをもいふなり

マタヌデモナイニ

月夜よしよゝしい。月夜よし月夜ましと重ねたる詞あるを。はぶきたるものあり。東屋のまやのと云るも。同じ格にて。東屋の東屋のとかさねたり。こてふは。こよとといふあり。こんといふにはあらず。こよをことといふは常あり。こんをことのみいへる例あし。すべて此ノ歌。諸注みな説得ず

君こずはねやへもいらじこむらさきわが本ゆひに霜はおくとも

清

○君ガコズハイツマデモ閨ヘモハイルマイ。カウシテ外ニ立ッテヽ。髪ヘ霜ガオクト云テモイトヒハセヌ。ヤッハリコヽデ待テ居ヤウ

宮城野の本あらの小萩露をおもみ風を待ど君をこそまて

○宮城野ノ本アラノ小萩ノ露ガ重ッニ風ノフイテクルノヲ待ッヤウニ。ワシハ君ヲマッワイノ。

八

本あらは。本だちのしげからず。あら〳〵生たるあり。さる故にあびきやすくて。とに露のおもきよしあり。こ萩のこゝ。小菅小柴などの類の小あり。木萩にはあらず。又小　はつけていふ詞のみにて。ちひさきをいふにもあらず。

あなこひし今も見てしが山がつのかきほに咲るやまとなでしこ

○アヽ戀シイ。ドウゾ今モ逢タイモノヂヤ。山中ノ家ノ垣ニヨウ咲テアルアノヤマトナデシコノヤウナカアイラシイソノコニヤ

清

津の國のなには思はず山しろのとべに逢見んとをのみこそ

○曰何ヲモホカノヲハ思ハセヌ。タヾ逢ヒタイ〳〵ト。ソレバッカリヲ言ジヤウヂウワシヤ思フテ居ルワイ。　とはにゝ。あひ見んへかゝれるにゝあらず。とゝに思ふといふ意あり。上の思はずといふを下へひゝかとハゝとこしなへの器にて常といふこゝろなり

せて。思ふといふことをしらせたり。

つらゆき

おきしまのやまとにはあらぬから衣ころもへずして逢よしもがな

○上ドウヅアヒナシニ又アウヤウニシタイフギヤ

ふかやぶ

戀しとは誰なづけゝんことならんおぬとぞたゞにいふべかりける

○戀シイナドヽ云名ハ。タレガツケタフギヤヤラ。ソンナマハリドホイ。名ヲイハウヨリハ。ナニカナシニ。死ヌルトヵスグニ云タガヨイワイ。キツウ戀シウ思フトキニハ實ニ死ヌルヤウナワサテ

よみ人おらず

みよし野の大川のべの藤なみのなみに思はゞわがこひ

上は序にておきしまハ大和の地名なりおきしまの大和といひて日本の總名にいひなして唐とはつゞけたり

おきしの島の大和とつゞくるよしゝはしゝ石上松淑首に見えたり

上は序なり大河の邊は地名にあらずいづこにても大河のほとりをいふなり

こゝろのうちとは心のうちのうちなり

めやは

○上一トウリニ思フフナラ。ワシガ此ノヤウニコヒシタハウカイ。一トウリノフデハナイワイナ

かくこひん物とはわれも思ひにきこゝろのうらぞまさしかりける

○サイシヨカラサ。後ニハコノヤウニ戀シカラウモノギヤトハ。ワシモ思フタコトギヤ。サイシヨノワシガ心ノウラナヒガヨウ合タワイナ

天の原ふみとゞろかしなる神もおもふなかをばさくるものかは

○神ナリト云フモノハ。ヨニオソロシイ。何ンデモタマラヌ。ケシカラヌイキホヒナモノギヤケレド。ソレデモ人ノ思ヒアウタ中ヲバトホノケルモノカイ。ソンナカミナリサヘトホノケハセヌフナレバ。タトヒ何フカ。アツタトテモ。ノクコトデハナイワシヤ

ひき野は河内國日置と書て今の俗にへきといふにありてれなるへし梓弓はひくと云かけし冠辭なりつらはかゞらなり

こり注とらず
夏野の草のとくしげく人のいひまわくといふなり

梓弓ひきの〳〵つゞら末つひにわがおもふ人にたのまれゝん

○目末テハドウヅ。ミガ此ノヤウニ思フ人ニ。名ガ立テ。イロ〳〵トウハサガシゲウナルデアラウ

此うたは。ある人あめのみかどのあふみのたねへに給ひけるとなん申す

夏引の手びきの糸をくりかへしてとまげくとも絶んと思ふな

○タトヒ世間ノウハサハドノヤウニシゲウゴザリマセウトモ。目イツマデモワタシヲ絶ウトハ。思召テ下サリマスナくりかへしとは長くつゞきてたえきれざる意にいへるふり。

此歌はかへしによみて奉りけるとなん

里人のとは夏野のまげくともかれゆく君にあはざらめやは

○人ノウハサヲハドカツテ。君ハトホノイテイクカ。在所デノウワサハ。タトヒ夏ノ野ノ草ホドシゲクトモ。オレガ途ズニ居ヤウカ。コレカラトテモアハズコハオクマイ。餘材の說〳〵し打聞きこえず

藤原ノ敏行ノ朝臣のなりひらの朝臣の家なりける女をあひまりてふみつかはせりけるをばにいまゝうでく雨のふりけるをなん見わづらひ侍るといへりけるをきゝて女にかはりてよめりける

在原ノ業平ノ朝臣

かず〳〵に思ひおもはずとひかたみ身をしる雨はふりそまされる

○ワシガ一ツシンセツニ思召テ下サルヤラサウモナイヤラ。ソコノホドハドウモキニ入シガタサニコヨヒノ雨テソレヲ考ヘテ見テ。ソレデワ

シガ身ノ仕合ヲ不仕合ヲモシレルヂヤガ。ソノ雨ハ。此ノヤウニ段々ト大ブリニナリマスコレテワシガ不仕合ヲモシレタヂヤワイナ。コノ雨デワシガ身ノ仕合不仕合ヲ知ルト申スワケハ。マアタヾ今ノ御タノ通リナレバ此ノ雨ガ止ンダナラ御出ガアラウシ。ヤッハリフッタラ御出ハアルマイヂヤ。スレヤコノ雨ハワシガ身ノ仕合不仕合ノシレル雨ヂヤワサテ

かず〳〵にといふ詞。諸説みなあたらず。これは俗言に深切にといふにあたれり。それまづ數〳〵とは物の多きをいふ言なり。さて古歌に。「わが戀はよむともつきじ云々など。戀の數かはきよしをつねによみ。又思ひのしげきよしをいふ。多きしげきは。戀る心の深く切なるをいへり。これにてかず〳〵にをもさとるべし。こゝの外にも。此詞をよめる古歌ども。みなこの意なり。考へあはせて知るべし。

ある女のなりひらの朝臣をとこころさだめずありきすと思ひてよみてつかはしける

よみ人しらず

大ぬさのひくてあまたになりぬれば思へどえこそ頼まざりけれ

○秡ノ時ニ大麻ヲアマタノ人ガ手ニ引ヤウニ。オマヘハ近イコロハ方方カラヒッハル所ガ多ウナッタナレバ思ヒハスルケレドモ。ワシハドウモオマヘヲ頼ミニハエイタサヌワイナ

かへし

なりひらの朝臣

おほぬさと名にこそたてれ流れてもつひによるせはあり、てふ物を

○サアワシハソノヤウニ引人ガ多イ大ヌサデヤト。名ニコソ立ラレタレ。ソノ大ヌサハ川ヘ流レテハユクケレド。ドコゾデハ流レテヨル所ノ瀬ハアルト云フノニ。アンマリソノヤウニ大ヌサヂヤ〳〵ト云テ下サルナ

能實集にみそぎする川の淵せにひゝあみを大ぬさなりと人や見るらん

万葉にしがの磯の鹽やくけふり風をいたみたちはのほらで山にたな引く上はまたくこれをとりたるなり又躬恒集にもしほやく磯のたく火のけふりこそ思はぬ方に立のぼるらし是はこの歌の下をとりたるなり心もきたく同じ

夜がれ新撰万葉に夜避ともかけり

ワシヂヤトテ末デハトウデヨル所ガナウテハ。ソノヨル所ハオマヘヨリ外ニアロカイノ

題志らず　よみ人志らず

須磨のあまの鹽やくけふり風をいたみ思はぬ方にたなびきにけり

○スマノ浦ノアマノ鹽ヲヤク烟ガ風ノツヨサニワキノ方ヘナビイテイクヤウニ。ワシガ思フ人モ。思ヒモヨラヌ人ノ方ヘナビイテイタワイノ

玉かづらはふ木あまたになりぬればたえぬ心のうれしげもなし

○オ前ハテウド。カヅラノアノ木ヘモ此ノ木ヘモハヒカヽルヤウニ。アチコチト御通ヒナサル所ガ方〳〵ニデケタレバ。ワシガ方ヲタエハナサライデモ。ソノタエヌ御心ガナンノウレシイコトモナイ

誰里に夜がれをしてかほとゝぎすたゞこゝもとにねたるこゑする

○夜中ニアレ時鳥ガツイコヽデ鳴ク聲ガスル。イツモトマル里ハドコノ里カシラヌガソノ里ヲバ今夜ハトマルノヲ一夜閼シテ。メヅラシイコヽチノ。庭デ寐タトミエル。アソコデチテサテナク聲ヂヤ

これはたゞ時鳥の歌あるを。こゝに入れるは誤なるべし。戀のたとへとしては。ねたる聲するといへると聞えがたし。然るを戀の意に注したるは。えひでとあり。菅家萬葉には夏の歌とし。六帖にもほとゝぎすの歌とせり。

いで人はことのみぞよき月草のうつし心は色ことにして

○イヤモウ人ト云モノハ。口バッカリナモノヂヤ。ウツリヤスイ心ハ。口トハキツイチガヒデサ

いつはりのなきよなりせばいかばかり人の言の葉うれしからまし

つき草は俗につゆ草ともいふこの花をもて紙にそめ又それをうつしてものを染ればうつし花といふなり

ちるをもかはるをも
うつろふと云うちに秋風とあるにはちる方なるべし然れば心のわれによらずうつろふにたとへたり

○誰デモ口デハ嬉シイ〻チ云テクレルケレド。皆ウソデ。チカラ頼ミニナラヌカ。ウソ云ッコトノ無イ世ノ中デアラウモノ　人ノ云テクレルコガ。ドレホドウレシイコトデアラウゾ

いつはりと思ふ物から今さらに誰まことをか我はたのまん

○ウソヂヤガトハ思ヒナガラモコレマデ。頼ミニ思フテ居ル人ノ云フコトナレヤワシヤヤツハリソレヲ頼ミニ思フテ居ルワイノ。クトヒ外ニマコトナ人ガアッタトテモ。今サラ心ヲウツシテ。誰ヲタノミニハセウゾイノ。ワシヤトツトサウ云心ハナイ

秋風に山のこのはのうつろへば人のこゝろもいかゞとぞおもふ

素性法師

○此ノゴロノ秋ノ風ニ山ノ木ノ葉ノ色ガカハッテチッテイクヲ見レバ。人ノ心モドウアラウゾガハリハスマイカトヲキヅカヒニ思ハル

六帖にはならんとすらんとあり

うつせみは現身なり世の人といふ冠辭なり

寛平ノ御時きさいの宮の歌合のうた

ともののり

蟬のこゑ聞はかなしなつころもうすくや人のならんとおもへは

○蟬ノナク聲ヲキキケバ。モウオッツケ秋ガ近イト思ヘバ頼ミニ思フ人ノ心モ秋風ガタッテ。心ザシガ。此ノ節ノ夏衣ノヤウニウスウナルデアラウカト。思フノテカナシイワイノ。餘材あまりくだくし。夏衣といへるは。蟬の羽衣の緑をかねて。たゝうすくといはん料の枕詞のみあり。打聞說二の句にかゝわず。

題しらず

よみ人しらず

うつせみのよの人ごとのしげゝればわすれぬものゝかれぬべらなり

そをだにはそれをだになり

○曰世間ノ人ノウワサガシゲヽレバ。ワレヲ忘レハセヌナガラ。オノヅカラトホノクノデアラウ。思ハルヽ。又人ヲワスレハセヌナガラ。オノヅカラトホノクノデアラウト思ハルヽ

あかでこそ思はん中ハはなれなめうをだに後のわすれがたみに

○思フ中ナラ。タガヒニアキノコヌウチニヵ。ハナレテシマハウヿヂヤ。ドウシテモ久シウナレバ。アキノクルナラヒナレバ。セメテ今此タガヒニアカヌトコロヲナリに後〳〵ノ思ヒダシグサニシテヵ。ハヤアキガキテカラハナレテハ。何ンニモ思ヒダシグサモナイワサテ。餘材わすれがたみの説わろし

わすれなんと思ふ心のつくからにありしよりげにまつぞかなしき

○コチノ思フヤウニモイヽ人ヲ思フテ此ヤウニ心ヲ苦シメウヨリハ。ワスレテシマハウゾト思ヘバ。又トウヤラ心ボソウナッテ。今マデヨリハナホキツウカナシイサウ思フ心ガツクカラシテ。ハヤマア。此ヤウニカナシウテハ。トテモワスレテシマハルヽヿデハナイ。千秋云。ともとは。二の句へつゞくべし。

わすれなん我をうらむなほとゞぎす人の秋にはあはんともせず

○ワスレテシマウト思フガ必ズオレヲ恨ムナヨ。時鳥ノ秋ニナラヌサキニ早ウドコヘカ。インデシマウヤウニ。オレモ人ノ秋風ニハアハウトハ思ハヌ。千秋云。二の句にてよみ切て。三の句は下へつゞけてよむべし。

たゞずゆく飛鳥の川のよどみなば心ありとや人のおもはん

○タヘズ流レテツヒニヨドンダヿノナイ。此ノ飛鳥川ノヨドンダヤウニ。オレガモシタマ〳〵サシツカヘテモアッテ。通ハヌヿガアッタラ。ナンヅ心ニシナノアルヤウニカノ人ガ思フデカナアラウ

この歌新輔集に入て女の歌なりかへしは「わすれなばたれかは人をうらむべきうきにおくれてしるはわれかは」

万葉に「人ごとをしげみこちたみあはざりきこゝろあるごとおもふなわが夫」「反歌の絶ぬつかひのかよはねばことしもあるごとおもひつるかも」

四ツ句。一本に心あるとやとあるにつきて。田中道まろが。心あるとやの。こもじのおちたるならんといへる。まことにさることなり。此ノ歌ふるきすがたなれば必まかるべし萬葉の歌の例みあまかあり。あるとやにては。語とゝのはず。

此ノ歌ある人のいはくあかとみのあつま人が歌なり

淀川のよどむと人の見るらめどながれてふかき心あるものを

○此間ワシガエイカヌチ。川ノヨドンダヤウニ。ナンヅトゞコホリガアルト思フテアラウケレドモ。ワシヤ末長ウイツマデモト忘フ深イ心ヂヤモノナンノトゞコホリガアロツイ

ふかさは淀のよせなり

そこひなき淵やはさわぐ山川のあさきせにこそあだ浪はたて

素性法師

そこひは海のそこ川の底など下のかぎりをのみ云にあらず上下四方いづれにも遠くふかさをいへり

紅のはつ花ぞめさいはりに衣はすらんともいふに同じくすべて初花を尊らとする中に紅は房のあまたある中にその最中なるがはやくさきてよき色なるゆゑにはつ花ぞめの色ふかくと云なり

○山ノ川ノ淺イ瀬コソザワ〳〵ト涙ハタツモノナレ。底ノナイヤウナ深イ淵ガサワグモノカ。深イ淵ハケツクサワギハセヌ。テウドソンナモノデシンシツニ深ウ思フ人ハ口ヘダシテ何ントモイヒハセヌ。シンシツラシウナンノカノト云ノハソレヤケツク心ノ淺イアダ浪ヂヤ

よみ人しらず

くれなゐのはつ花ぞめの色ふかく思ひし心われわすれめや

○目サイショカラ深ウ思ヒソメタ心ヂ。ドンナ〻ガアツタトテワスレウカワシヤ。イツマデモ忘レルコトデハナイ

はらの左大臣

みちのくのしのぶもぢずり誰ゆゑにみだれんと思ふ我ならなくに

○目タレユエニ外ヘ心チチラサウヅ。オマヘヨリ外ニ心チチラスワシ

色とになるは次のうたにて見るに色のとにかわり行なり秋風になびくを我になびくまでそへしと云はわろしたゞ色の異になるといはん爲に三四の句はよめりと見るべし

ヂヤナイヅエ。志のぶもじずりの説。頭注よろし。打聞わろし

よみ人志らず

思ふよりいかにせよとか秋かぜになびく淺茅の色とになる

○ワシハコレホドニ深ウ思フニマダ此ウヘヲドウセイト云フテ圖人ハ心ガハリノシタフヅ。コレホドニ思フ此ウヘハモウドウモ。シヤウガナイ

濁

ちゞのいろにうつらふらめど志らなくに心し秋の紅葉ならねば

○人ノ心ハアチヤコチヤイロ〳〵ニウツルデアラウケレド。心ハ紅葉ノヤウニ色ノ見エルモノデハナケレバ。ウツロウノガシレヌ

餘材はじめの説わろし。打聞よろし。

小野ノ小町

此歌は人の我を怨みんといふとをいひおこせしか又ハ人ゴトに淵てよめるなるべし

あまのすむ里の志るべにあらなくにうらみんとのみ人のいふらん

○海邊ノアマノスム里ノ案内者ニコソ浦ヲ見ヤウトハ云ハウハズノフナレ。ワシハソンナ。浦ノ案内者デモナイニドウ云フテ。ウラミヲ云ハウ。ウラミヲ。云ハウバッカリ。ヒタモノ人ノイフヲヤラ

志もつけのをむね

くもり日の影とゝしなれる我なればめにこそ見ねど身をばはなれず

○ソラノクモッタ日ニハ。人ノ影ノアッテモ。見エヌヤウナモノデソレト目ニ見エコソセヲ。ワシハ戀ニヤセホソッテ。此ヤウニ影ノヤウニナルホド思フフナレバ人ノ影ノ身ヲハナレヌヤウニ。心ハシヤウヂウ。思フ人ノ身ヲハナレハセヌ

つらゆき

この歌ハ人の方よりわかこゝろのかハれるやうにいひおこせし時のこたへなるべし

色もなき心を人にうめしよりうつろはんとはおもほゆなくに

○色ノアルモノナレバコソ。ウツロウテカハリモセウケレ。人ノ心ハ色ハナイモノナレバソノ色モナイワシガ心ガ。カノ人ニシミコンダカラハ。イツマデモカハラウトハ思ハレヌ

よみ人しらず

さかもせねはさもせぬなり

これより下五首は立かへりて戀る心なり

めづらしき人を見んとやさかもせぬ我下しものとけわたるらん

○久シウアハヌメヅラシイ人ニアハウトテヤラ。ヨウシモセヌノニ。ウシガ下紐ガコノゴロハ度〳〵ヨウトケル○千秋云。譯にサウシモセヌノニとあるは。即チ下紐をときもせぬにといふことなり。

かげろふはそれかあらぬかといはん冠なり

かげろふのうれ〻あらぬかはる雨のふる人なれば袖ぞぬれける

○㊀サウカサウデハナイカ。モウ見ウスレタクライナヤ。サテモ〳〵㊁

大船にふなだなうちてなど万葉によめり小舟にはその棚無きなり

この歌後撰にみやづかへ〻侍りける女はどひさしくありて物いはんといひ侍りけ

久シウアハナンダ人ヲ見レバ。イゼンノ〻ガ思ヒダサレテ。涙ガ〻コボレル

四の句。六帖なた歌昭本に。ふる人見ればとあるぞよろしき○千秋云。此ノ集のなれば〻。みをなにうつし誤れるなり。みとなると似たり

ほりにてぐたな〻しを舟こぎかへり同じ人にや戀渡りなん

○堀江ヲ往來スル小船ノ。イク度モ同ジ川筋ヲノボリ下リスルヤウニ。ワシハマヘ方ノ同ジ人ヲ。又タチモドリ〳〵。此ヤウニイツマデコヒシタウコヤラ

清同

わたつみとあれにしとこを今さらにはらはゞ袖や沐とうきなん

○ワシガ床ハ。久シウウチタエテ思フ人ト逢テ寐タ〻モナイユエ。カナ

伊勢

るにおそくまかりければ批把の左大臣「よひのまにはやなぐさめよいその上ふりにし床も打はらふべくそのかへしとて今の歌ありいせの集も同じ

シサニ涙ハ海ノヤウデ。ソノ海ノアレルヤウニアレテシマウタ床ジヤニ。久シフリテ又今サラ。ソノ人ニ逢フデヤトテ。ソノ床ノツモツタ塵ヲ。袖デハラウタナラ海ヘ涙ノウクヤウニソシガ袖ガ涙ニウクデアラウ

いにしへに猶立かへる心々なこひしきとにものわすれせで

つらゆき 清

○今デモヤツハリ昔ニ立カヘッテ。マヘ方ノ人ガ懸シイ。サテモ〳〵物ワスレセヌ心カナ。ドウゾ此ノヤウニ懸シイ〻ニ物ワスレナシテ。マヘ方ノ人ヲバドウゾ忘レテシマハイデ

人をおもひにあひおもひてあひがたくありければうの家のあたりをまかりけるをりに雁のなくをきゝてよみてつかはしける

大とものくろぬし

思ひいで〻戀しきときは初かりの鳴てわたると人おもるらめや

○思ヒダシテ戀シイトキハ。アノ雁ノ鳴テワタルヤウニ。我モ此ノトホリニ此門ヲ泣テトホルト云フテ。コノ家ノ内ノ思フ人ハ知ウカヤ。カウヂヤトハシリハスマイ

右のおほいまうち君すまずなりにければかのむかしおこせたりけるふみどもをとりあつめてかへすとてよみておくりける

典侍藤原よるかの朝臣

たのめこし言の葉今はかへしてん我身ふるればおきどころなし

○コレマデイロ〳〵ト末タノモシサウニ。オウシヤッテ下サレタ御文ニ

ある人云鳴てわたるけ調部に見えてその家のあたりをまへわたりする心なり

住ずなりにけるとはいにしへは女の方へおこたるものゝいきて住しなり

近院は春日の北烏丸東號松殿右大臣能有家也この右大臣は文徳天皇の御子にて源朝臣なり

おのがものからはおのが物ながらなり仁徳紀に諺曰有海人耶因已物以泣云々

モ。モウ御モドシヤシマセウゾ。ワタシガ身ガコノヤウニアカレテシマウタレバ。今デハモウ此ヤウナ御交ナドハ。此ノ方ニハオキドコガゴザリマセヌ

ふるればは。ふるさるればあり。ふりぬればとは異あり。

近院ノ右のおほいまうち君

かへし

今はとてかへすとのはひろひおきておのがものから形見とやみん

○モウハト云テカヘシオコサレタ此ノ文ヲ。ヒロウテトツテオイテ。モト自分ノ物ナガラモソナタノ形見ヂヤト。思フテ見マセウカイ

題しらず　よるかの朝臣

玉ぼこの道は常にもまどはなん人がとふとも我かと思はん

○オマヘハ今デハ。毎夜御通ヒナサル所ガ外ニアルヂヤガ。タマ〳〵今夜コレヘ御出下サレタハ。定メテ道ヲトリヂガヘナサツタデアラウヂヤケレ尼コノウヘトテモ。イツデモコヨヒノヤウニドウゾ道ヲトリナカヘテ御出下サレバヨゴザリマスソシタラ余ノ人ノ所ヘ御出ナサルノデモ。實ニワタシガ所ヘ御出下サレタノカト思ヒマセウワサテ

棚橋ハ人の家の前の小川などに板にて棚のかたちに柱立てわたしたる小ばしなり

昇の朝臣ハ河原ノ左大臣の男塔の弟なり

よみ人しらず

まてといはゞねてもゆかなんしひてゆく駒の足をれまへのたな橋

○マアシバラクトヤスカラニハコヨヒハ。トマツテモインデ下サレカシ。ソレニナンヂヤトリイソイデ。トツカハトイナシヤルハサテモ〳〵キコエマセヌ。カウシテフリモギツテイナシヤルヘアノオ人ノ馬ノ足ヲツマヅカシテコケサシテク　皆門ノ前ナ溝ノ橋ヨコリヤ。○千秋云。譯のはてに。コリヤといふ詞をうへられたるをもしろし。さる勢ある歌なり。さて此ノ歌俳諧の類なり。

中納言源のぼるの朝臣のあふみのすけに侍ける

閑院ハ源宗于朝臣の女なり

ときによみてやれりける　閑院

相坂のゆふつげ鳥にあらべこそ君がゆきゝをなく〳〵もみめ

○ワシガ身モ。相坂ノ關ニハナシデ。アル庭鳥ナラバ。ナキ〳〵モセメテハオマヘノ近江ヘ御通ヒナサルノチナリニ見ヤウケレ。ワシハサウシテ御往來ナサルノヲ見ルヿサヘナラヌガカナシイワイノ

題しらず　伊勢

故郷にあらぬものからわがために人の心のあれて見ゆらん

○故郷コソアレテ見ユルモノナレ。ワシガ思フ人ノ心ハ。故郷デハナケレドモワシガタメニ此ノヤウニアレテウト〳〵シウナッタハドウ。云フヤラ

餘材打聞わろし。見ゆといへるは古里のあれて見ゆるかたにいへる詞

和名抄に防己一名解離和名あをつゞらと見し延義式にも苛つゞらと見えたり六帖にハたづねゝれども あふよしもなしとて作者なし

六帖に大ぞらにハかよふ人もきてえぬをものおもふごとにながといはるゝ

あり人のこゝろの方へかけては見べからず。　寵

山がつのかきほにはへる青つゞら人ハくれどもとづてもなし

○上思フ人ノ所カラ此ノアタリヘ。人ハ度々來ルケレドモ。ワシガ方ヘト云テハチカラコトツテモナイ。上句はたい〳〵るの序なり

さかねのひとざね

大ぞらハ戀しき人のかたみかはものの思ふごとにながめらるらん

○空ハ。戀シイ人ノ形見カイ。カタミデモナンデモナイニ。ドウ云コトデ戀シフ思フタヒゴトニ。コノヤウニナガ、ラルヿハヤラ

よみ人しらず

あふまでのかたみも我ゝ何せんに見ても心のなぐさま

源氏あかしの巻に御使なべてならぬ玉もかつけたりとかけるもところがらにより玉藻によき裳をよせていへるなり

なくに

○又アフマデノ形見ノモノモ。ナニヽゼウゾ。ヤクニタヽヌ物ヂヤ。コレヲ見ヲモオレハ。戀シウ思フ心ガ。チエカラヤスマルフモナイ

おやのまもりける人のむすめにいと志のびにあひて物らいひけるあひだにおやのよぶといひけれどいとにかへるとてもをなんぬぎおきていりにけるうの後もをかへすとてよめる　おきかぜ

あふまでのかたみとてこうとゞめけめ涙にうかふもくづなりけり

○コノ裳ヲノコシテオカシヤツタハ。定メテマタ逢フマデノ形見ニ見ヨトイフ御心デコソゴザラウガ。コレヲ見レバ。オマヘノフガ思ヒダサレテ。涙ガナガレテヤ。海ノ浪ニウク藻屑ノヤウニ涙ニウク裳ヂヤワ

イノ

題志らず　よみ人志らず

かたみころ今ハあたなれこれなくハ忘るゝ時もあらまし物を

○形見ハヤ。ケツク今デハモウ。ニクイカタキヂヤワイノ。コレガナクハ。チリニハ又ワスレテヰルトキモアラウ物ヲ。コノ形見ガアルユエ。見ニハ思ヒダシ〳〵シバシノマモワスレラレヌ

頭書古今和歌集遠鏡卷之十四終

流布のいせ物かたりにもほいにハあらでとありわが苔れる妻にハあらで物いふ故に本意にハあらぬ義にみないへれと眞名伊勢物語にハ穢(ほ)僧者と書り今もしかありけんを流布のいせ物かたりによりて後なほせしものか本意とてハこゝの詞にふさハす

頭書 古今和歌集遠鏡卷之十五

戀歌五

五條のきさいの宮のにしのたいに住ける人にほ(カモ)いにハ(ヲハレテ、ハヘナウテ)あらでものいひわたりけるをむ月のとをかあまりになんほかへかくれにけるあり所ハきゝけれどこゝものもいはで又(アクルトシ)のとしの春梅の花ざかりに月のおもしろかりける夜(去年ノヨチ)こぞをこひてかの西のたいにきて月のかたぶく(ムカ)まであばらな(アシヤウシモナ)る(イ所ノ)いたゞきにふせてよめる

在原ノ業平ノ朝臣

月やあらぬ春やむかしの春ならぬ我身ひとつハもとの身にして

○今夜コヽヘ來テ居テ見レバ。月ガモトノ去年ノ月デハナイカッア。月ハヤッハリ去年ノトホリノ月デヤ。春ノケシキガモトノ去年ノ春ノケシキデハナイカサア。春ノケシキモ梅ノ花サタヤウスナドモ。ヤッハリモトノ去年ノトホリデ。ソウタイナンニモ。去年トチガウタコハナイニ。タヾオレガ身一ッバッカリハ。去年ノマヽノ身デアリナガラ。去年逢タ人ニアハレイデ。其ノ時トハ大キニチガウタコワイノ。サテモ〳〵去年ノ春ガ戀シイ。

二つのやはやはの意ありさて結句の下へもとのやうにもあらぬことかな。といふ意をふくめたり。怨ふくめたることは。月やはあらぬ春やはあらぬ。月も春も。もとのまゝおるにといへる。上ノ句にて聞えたり。すべてこの朝臣の歌は心あまりて詞たらずといふは。かゝるところあり。餘材打聞ともにわろしかの說どものごとくにては。してとゝぢめたる語のいきほひにかゝはず。よく〳〵語のいきほひをあぢはひて心得べき歌ぞかし。

人と指ハ兄の時平公なり

川をわたるハ人に逢にたとへて云ふこと多くあり

題しらず　藤原ノなかひら朝臣

花すゝき我こそ下に思ひしがほに出て人にむすばれにけり

○内〳〵我コソ逢ハウト思フテ其心デ居タニ。ソレデマア。我ガオモイレハムダヿニナッテ。此ノ花薄ノ穗ニデタノヲ。結ンダヤウニ。オモテハレテ外ノ人ガトリクンデ逢テシマウタワイ。ハレ殘念ナヿヤ花すゝきをむすぶと。伊勢家集此ノ歌のはしの詞に見えて。餘材抄に引り。

よろにのみ聞まし物を音羽川わたるとなしにみなれうめけん　藤原ノかねすけ朝臣

○タヾヨソニバカリ聞テ居ヤウデアッタモノヲ三アウデモナシニ。ナニシニ此ヤウニナレツメタヿヤラ。ナマジゲニナレナランデ。ソシテ逢

わがおもふ人の我ごとく思ハざる故によめるなるべし人とてハ大かたを云がごとくにて思ふ人をふくめたり

人ハわれをよそに思ふさまにみゆるとなり

レヌノハ。サテ〳〵ツライモノギヤ

凡河内みつね

わがごとく我をおもはん人もがなさてもやうきと世を心みん

○サテ〳〵ウイコヤ。オレハコレホド人ヲ深ウ思フニ。人ハトカクソレホドニ思フテクレヌ。オレガ思フトホリニオレヲ思フテクレル人ガアレカシ。ソレデモヤッハリ此ノヤウニウイモノカ。タメシテ見ヤウニ世は。男女の中をいふ世おり。○千秋云。世といへる詞の譯なきハ。一首の譯のうちに。そのこゝろハあれバなるべし。

もとかた

ひさかたのあまつそらにも住なくに人ハようにぞ思ふべらなる

○天ニ住デ居ルワシデモナイニ。ドウシタコカ。人ハワシヲトホヨソニサ思フヤウスニオモハルヽ

なきたる朝ハ朝和なりなくとハ和らぐ意にて波のたゝぬをも風の吹やむにも云フ心のうへにてなぐさむと云も心のやわらぐなり

見てもまた又も見まくのほしけれバなるゝを人ハいとふべらなり

○オレハ逢テモ〳〵ヤッハリ又々アヒタウ思フニ。人ハ段々ナレルノヲイヤガルヤウニ見エル。　見まくほしければハ。見まくのほしきにといふ意あり。古今歌にはこのおもほし。

きのとものり

雲もなくなきたるあさの我なれやいとはれてのみよをべへぬらん

○雲モナウテ風モナイデアル朝ノ空ハヨウ晴テアルモノヂヤガ。オレハソノヤウナモノヂヤヤラ。人ニイトヒキラハレテバッカリ。一生ヲタテル。カウタトヘテイフワケハ。其晴ト被厭ト詞ガ同ジコトヂヤニヨッテ歌ト云モノハ。アヂナコヲヨムモノヂヤナイカイノ

よみ人しらず

花がたみハ籠の目の花のごとく見たてゝ云なるべしかたバみといふも籠目なり

浮和布に脈目をよせ刈に假をよせていへり

花がたみならぶ人のあまたあれバ忘れぬらん數ならぬ身は

○㊀ホカニイクタリエヽヨイノガアルナレバ。ワシガヤウナ人カズデモナイ身ハワスレラレタデアラウ

うきめのみおひて流るゝ浦なれバかりにのみこゝろあまハよるらめ

○ナニヽツケテモ。ウイフバッカリデ泣テクラスワシナレバ。思フ人ノタマ〳〵ニミエルノモ。タヾカリソメニ。口フサゲニ。チヨット立ヨラルヽバカリノコデコソアラウケレ。マコトノ心ザシデ見エルトハ思ハレヌノ

あひにあひて物思ふころの我袖にやどる月さへぬるゝがほなる

いせ

○此ノヤウニモノ思ヒヲシテ涙デ。袖ノヌレテアル時節ヂヤトテ。此ノ袖ヘウツヽタ月ノカホマデガ。ワシガ顔ト同ジヤウニヨウソロウテヌレテ見エルコトワイノ。

あひにあひての說。餘材わろし打聞もときをへず。すへてこの詞はこれと。かれとよくあひかあひて。同じやうなる意あり。

秋ならでおく白露ハねざめするわが手枕のまづくなりけり

よみ人しらず

露ハ秋ヨウオクモノヂヤガ。秋デナシニオク露ガアル。ソレハ。物思フテ夜半ニ目ヲサマシテ居ルワシガ枕カラ床ヘオチル涙ノ雫ヂヤワイ

すまのあまの鹽やき衣をさをあらみま遠にあれや君がきぬ〴〵

道ノアヒダカ遠イユエカシテ。マテドモ〳〵マダ御出ナサラヌ。アヽオ

鹽やきのきる藤ころもハをさのおらくよみの少けれバその間遠なるによせて君が住里とわがやどゝその路のほどの間遠にしあれバにや君が來ぬさぬとなり

弦ハかるもの故に假にだにといハん序なり

鳴の羽かきとハ万葉に羽振鳴鴨といひたるにて心得べしハ

ツイフギヤ。上句ノ意餘材のごとし○千秋云。四の句の譯。まどほなる故にや。といふ意にとられたるなり。まことにこの歌。その意にあらざれバ。よろしからず

山しろの淀のわかこもかりにだにこぬ人たのむ我ぞはかなき

セメテカリソメニチヨツトサヘ來テクレヌ人ヲ頼ミニ思フテ居ル。ソシハアヽラチノアカヌ心ヂヤ

あひ見ねバ戀ころまされみなせ川なにゝ深めて思ひうめけん

ワシガ中ハ水ノナイト云水無瀬川ノヤウナモノデ。逢フガナケレバタヾ戀シイコトコソマサレ。水ノマサツテ深イヤウナフハナイ中ヂヤニ。ナニシニ末カケテ深ウワシハ思ヒソメタフヤラ

の鳴のはねがきもゝはがき君がこぬ夜は我ぞかずかく曉ニハ鳴ノハチガキト云テ。鳴ガキツウシゲウ羽ダヽキヲスルモノヂヤガ君ガコヌ夜ハソノ鳴ノハチガキホドシゲウ。ワシガサイク度トナシ一タメ思ヒツイテナゲキマス。この歌の下ノ句の意。ときえたる人あし。數かくとは。たとへの鳴い百羽がきの詞によりていへるのみにて。意はたゞ歎きするとのしげきよしなり。

玉かづら今ハたゆとや吹風の音にも人のきこゑざるらん

㊀モウハキレテシマウトテヤラ。此コロハイツカウ㊁ヲトヅレモセヌわが袖にまだき時雨のふりぬるハ君が心に秋やきぬらん

マダソノ時節デモナイニ此ノヤウニワシガ袖ヘ時雨ノフツタハ。君ガ心ニ秋ガキタカシラヌ。ソレデ此ノ袖ノヌレタハ涙ノシグレヂヤ

山の井のあさき心も思はぬに影ばかりのみ人の見ゆらん

ね打をあまたする鳥なり

玉かづらハ絶るといハんとてなり吹風も音といふ序なり

こハ人のわれにまたしからぬなり

ワシハ山ノ井ノヤウニ淺イ心デハナイニドウ云フデ君ハ。イツデモ。影バカリ見エテヨリツカヌヤラヌフヤラ。ばかりのみとは。いたづらに重なれる詞にはあらずのみはいつとてもの意あり

わすれぐさたねとらましを逢ことのいとかくかたき物とは知りせば

此ヤウニキツウ逢フノナリニクイモノデヤト云フチトウカラシツタナラ忘草ノタチチトツテオカウデアツタモノヲ。ソシタラソレヲ蒔テハヤシテ。コノ節戀ヲワスレルヤウニセウモノ

こふれどもあふ夜のなきハ忘草夢路にさへやおひ茂げるらん

ナンボ戀シフ思フテ寐テモ夢ニモ逢ウト見ル夜ノナイハ。カイ人ガワシヲ忘タワスレ草ガ。夢ノ道ヘマデハエシゲツタカシラヌ

夢にだにあふをかたくなり行ハわれやいをねぬ人やわ

この歌後撰にふたたび入たり

すこ〳〵

夢ニサヘアハレヌヤウニナツテキタハ。ワシガモノ思ヒテエチムラヌ故カマタハ君ガワシヲ忘レテ心ガカヨハヌノカ。餘材わろし打聞よろし

けんげい法師

もろこしも夢に見しかば近かりきおもはぬ中ぞはるけかりける

唐ハキツウ遠イ所デヤト聞テ居ルニソレモ夢ニ見タレバ。近イフデアツタカトカク唐ヨリモドコヨリモ遠イハ思ハヌ中テヲコサルワイ

さだのゝぶる

ひとりのみながめふるやのつまなれば人を志のぶの草ぞ生ける

長雨ガフレバフルイ家ノ軒ハ。クサツテ。忍草ガハエシゲルヤウニ。タツヌヒトリ物思ヒノシンキナナガメバツカリシテ月日ヲオクルワタ

の登ハ仁明天皇の御子母ハ更衣三國氏なりはじめ源朝臣の姓をたまハりその後母の過失によりて族籍をけづられ出家して沙

彌源寂といへり貞觀八年遠俗の勅ありて貞の朝臣を給る事三代實錄に見えたり

拾遺の物名に忠岑が歌とす

シナレバ人ヲ戀シノブ心ノ忍草ガ・シゲウナルワイ

僧正遍昭

わがやどは道もなきまであれにけりつれなき人をまつとせしまに

心ッヨウテ來モセヌ人ヲクルカ〳〵ト待テ居タマニ。ツイ月日カタツテ。コチノ庭ハ。草ガアノヤウニシゲッテ道モナイホドニアレタワイ

今こんといひて別れしあしたより思ひくらしのねをのみぞなく

チカイウチニ又來ウト云テ別レテインダ朝カラシテ。毎日ソノ人ノコトバッカリ思ヒクラシニクラシテヒグラシノ鳴クヤウニ。オレヤ泣テバッカリヲ居ル

よみ人しらず

こめやとハ思ふものからひぐらしのなく夕暮ハたちまたれつゝ

ナンボ待ッタトテ來ウカヤクルコトデハナイトハ思ヒナガラモ。夕方ヒグラシノ鳴クシブンニナレバ門口ヘ出テ立テ居テハモシモヤト待ッ心ガアッテ。ドウモ思ヒキッテハ居ラレヌ

今しハとわびにし物をさゝがにの衣にかゝり我をたのむる

カウ久シウ來ヌカラニハモウハト思フテ力ヲオトシテ氣ヲクサラカシテ居タモノヲ。蛛ノ糸カキルモノヘカゝッテドウカ又頼ミノアルヤウニ思ハセル。コノ蛛ガ。蛛ノ糸ノキルモノヘカゝルノハ待ッ人ノクルシラセヂヤトヤラ云フヂヤニヨッテサ

今ハこじと思ふものからわすれつゝ待るゝとのまたもやまぬが

モウクルコハアルマイト思ヒナガラ。ソレナウスレテハ又シテハ待ッ

今しのしハ助辭にて今ハといふなりわびにしといふにてほどへたる心ありさゝかにハ日本紀私記に云ふ蜘蛛の別名也とあり又蛛の衣にかゝれバ思ふ人の來ると云諺あるにより引たのませるをつゞめたのむるといふなり

貫之集雨ふらんよりおもはゆるぬば玉の月にたにこぬ人のこゝろハ

万葉にはるかすみ棚引にけりいほりして秋田かるまて思ハしむとて

雪舟集に我せこがきまさめよひの秋風ハ

心ガマダマアヤマヌカナサテモ〳〵
月夜にハこぬ人また。るかきくもり雨もふらなんわびつゝもねん

此ヤウニサヤカナ月夜ニハ來ヌ人ガモシヤ。來モセウカト待レテキガモメルイツツマツクラニ雲ツテ雨ガフルトモスレバヨイニソシタラツライコヂヤト思ヒ〳〵寐テシマハウニ

うゑていにし秋田かるまで見ねこねばけさ初雁のねにぞ鳴ぬる

五月ノコロ此ノ田ヲウエテオイテ。インダ人ノ此ヤウニモウソノ田ヲ苅ルジセツニナルマデ。待ツテモ〳〵ワセチバ。サテモ〳〵ナサケナイ人カナトオモハレテケサ始メテ胜ガナイタガソノ雁ノヤウニヤウシモナイタ

こぬ人をまつ夕暮の秋風はいかにふけべかわびしかるらん

コヌ人ヲ待テ居ルユフ方ノ秋風ハドノヤウニ吹クコトデコレホド悲イツライコヂヤヤラ

久しくもなりにける哉住のゑのまつハくるしき物にぞ有ける

ワシガ思フ人ノ來テ逢フタハイツノコデアツタヤラ。ソレカラ一向ニアハズニマアア〳〵久シウナツタコカナ。來モセヌ人ヲ待ツノハサテサテクルシイ物デヤゴザルワイ

久しくといふ縁に。住のえの松といひその松を。人をまつにいひかけたるなり

住のゑのまつほど久になりぬれべあしたつのねになかぬ日ハなし

かねみのおほきみ

こぬ人よいきうちめゝきかな

すみよしと詠ハわろし住吉とかきてもすみのえとよむなりいにしへすみよしといひしてとなし吉をえとよむハ古言なり後によしとよみあやまりしなり

鶴ハ松に多く住といひ久しきものなれハいひかけたり

わが宿ハみわのやまもとさびしくとふちひ來ぬ杉たてる門

コヌ人チクルカ〳〵ト待テ居ル間タガ久ウナッタレバ毎日ナカヌ日ト云ハナイ

なかひらの朝臣あひ志りて侍けるをかれかたになりにけれべちゝがやまとのかみに侍けるもとへまかるとてよみてつかハしける　伊勢

みわの山いかに待みん年ふとも尋ぬる人もあらじと思へば

ワタシモモウ京ニ居テモオモシロウナイニヨッテ。此ノ度大和ヘマデ。マタルガ三輪ノ山本トムライキマセト古歌ニヨンデアルヤウニ今カラアノ方デ戀シイ人ヲ待ッタトテモ何年タットモ。タレモ尋チテ來テクレル人モアルマイト存ジマスレバ。ドウシテマア待チナセテ逢レマセウノイノ

上ハ序なり秋ハぎのうつり行が如く人の心も移り行かな

志ぐれにとあるハあやまりなり時雨とゝすべし

風に志たがふ木葉のごときわが心ならね

題志らず　雲林院のみこ

吹まよふ野風を寒み秋萩のうつりもゆくか人のこゝろの

アチコチトフキマヨウ野ノ風ガサムサニ萩ノ花ノチッテユクヤウニソヘウツッテユクカマア。餘材わろし打聞よろし

をのゝおまち

今ハとて我身時雨にふりぬれべをのはさへにうつろひにけり

○ワシガフルウナッタレバモウイヤと思召テ。マヘカタオッシヤッタ御約束ノ御詞マデガチガウテ參ッタワイナ、時雨はふりといひ。又とのうつろふといはん料あり。○千秋云。この歌ハ二三一四五と。句をつゞけてこゝろうべし

小野さだき

人を思ふ心このはにあらべこそ風のまに〳〵ちりも乱

バやすくハみだれしとなり

あま雲ハようといふ冠辭なり雲ハ遠くてのみ見ゆるものゆゑに冠にのみかきたるをかく下へかよハせてたとへとせるハいにしへになきとなり

れめ

○人ヲ思フ心ガ木ノ葉ナラバコソ風ノフクニシタガウテ。チリミダレモセウケレ。ワシガソナタヲ思フ心ハ。木ノ葉ノ風ニチリ亂レルヤウナカルくシイ心デハナケレバ。何事ガアッタトテモ。ナンノメツタニカハラウヅイ

なりひらの朝臣きのありつねがむすめにすみけるをうらむるとありて去ばしのあひだひるハきてゆふさりハかへりのみしければよみてつかはしける

あま雲のようにも人のなり行ハさすがにめにハ見ゆる物から

○空ノ雲ハ目ニハ見エルケレモ遠イヨソノモノデヤガ。オマヘモチカゴロハテウドソレデ晝ハ御出カアッテ。サヌガ目ニ見エハシナガラヨソくシウナッテマアチカラ夜ルオトマリナサッテ下サルコハナイ。サテモくキコエマセヌナサレカタカナ

風ハやみハ風ハやくしてなり

なりひらの朝臣

かへし

ゆきかへり空にのみしてふるとハ我ぬる山の風ハやみなり

○ワシチ雨雲ニタトヘラレタガナルホドヨイタトヘヂヤ。其雲ノヤウニワシガ。イタリキタリバツカリシテ足チトメズニタテルノハ其雲ノカヽッテ居ル山ノ風ガツヨサニ。トドマッテ居ルノナラヌヤウナモノデ。ワシガカヽッテ居ルソナタノ心ガミツクサヽニドウモ夜ルハトマラレヌヂヤワイノ。ふるは。雨雲の縁ゐり

題しらず

かげのりのおほきみ

唐衣なれハ身にこそまつはれめかけてのみやハこひんと思ひし

ある説にうらに散らんとハ紅葉にそへていへる風あさ風にちるものハこの葉なればその詞をすゑざれどそれと聞ゆるをバ後の歌のごとくさびしくハいにしへハいハざりけれバこの歌もりのこゝろにや

○キルモノハ着ナレヽバヤハラカニナツテ。身ニヒツダリトツキマツハレル物ナレバソノ通リニ人モ。ナレタナラバ。身ニシタシウコソナラウハズナレソレニ馴テカラモヤツハリ。此ヤウニコソ〳〵シウテ。シヤウザウ心ニカケテ戀シウ思フテハツカリ居ヤウナトハ思ウタナカイナレナレテカラモヤツハリ此ヤウニアラウトハ思ハナンダ。かけては衣の縁なり

秋風ハ身を分てしもふなくに人の心のうらになるらん　ともゝり

秋風ハ雲ヤ霧ナドヲ吹分ルヤウ。人ノカラダヲ分ケテ。腹ノ内ヘ吹テハイルモノデモナイニ。ワシガ思フ人ノ腹ノ内ナ心ガ。風ニ木ノ葉ノ空ヘチルヤウニ。ヨソヘウツヽタハドウ云フヤラ

上句の説　除村打聞ともにわろ　。かの説どもの如くにては。身を分てといふといたづらなり。

つれもなくなり行人の言の葉ぞ秋より先の紅葉なりけり　源宇干朝臣

次第ニツレナウナツテユク人ノ詞ガサ。秋ヨリサキノ紅葉デヤワイナゼトイフニマヘカタ云テオイタフガ。サッパリカハッテシマウタワサ。木ノ葉ノ色ノヤウニ

こゝちろこなへりけるころあひ去りて待ける人ののきはでこゝちおこたりて後とぶらへりければよみてつかはしけける　兵衛

去での山ふもとを見てぞかへりにしつらき人よりまづ越じとて

サキダッテハワタシモワヅラヒマシテ。スデニ死ニマスデ。アッタガ。ッ

字子塁三の句とのハや末の句もみちなるちんとあり

兵衛ハ高經朝臣のむすめといへり

やけたる茅の葉とハ春野をやきたる時に燒のこりたるなり

今ハおもひがたえすもゆるといふハ思ひのひに火をよせたり

六帖にハ末の句待ぐきものを

レナイオマヘヨリ先キヘワシハシデノ山ハコエマイヅト存シテ。ソノ間マデ參ッテ見テヤモドッテ參リマシタ

あひ志れりける人のやうやくかれかたになりけるあひだにやけたるちの葉にふみをさしてつかはせりける　こまちがあね

時過てかれ行をの〻淺茅にハ今ハ思ひぞ絶ず燃ける

秋モ過テ冬ガレニナッタ野ハ火ヲツケテモエル物ヂヤガ。テウドソノ通リデ年ガイテオマヘノ御心ノカレ〳〵ニナッタワタシハ今デハモウヂヤウヂウムヲノ思ヒガヲエマスワイナ。ソレデ此ノ淺茅モ此ノ通リニヤケマシタ。ゴラウジテ下サリマセ

ものおもひけるころ物へまかりける道に野火のもえけるを見てよめる　いせ

冬枯の野べとわが身を思ひせべもにても春を待ましも

うゝといひながるるといふみなホの緣の詞なり

のを

人ニ見ステラレタワシガ身モ。冬枯ノアノ野ヂヤト思フナラ。アヽシテ燒ヤウニ。今コソ思ヒガモエルケレドモ。ソレデモ又春ニナッタナラ芽ガデルデアラウト思フテ。春ヲ待タウモノヲ。ワシハモウアノ冬枯ノ野トハチガウテ。春ニナッタトテモ芽ノデル頼ミモナイ身ヂヤワイノ。從女シウモ。スヰリヤウシテタモイノ

題志らず　とものり

水の泡の消てうき身といひながら流て猶も頼なるゝ哉

水ノ涙のキユルヤウニキエルホドウイ。我身ヂヤト思ヒナガラ。イツモカウバカリデモアルマイト。マタ末ヲ頼ミニ思フテ。ヤッパリマア消モセズニカウシテ居ルハサテ〳〵ラチノアカヌ我心カナ。千秋云。ながらへてを水の緣にてながれてといへり。

よみ人志らず

みなせ川有て行水なくハこうつひに我身をたゝぬと思はめ

水無瀬川ニ有ッテ流レル水ガナイナラバコソ。ワガ中ヲ。トヲ〳〵切テシマウタト思ハウナレ。水ノナイト云フ名ノ水無瀬川サヘヤッパリ水ハアッテ流レルナレバ、ヲ中モ絶タヤウナレドヤッパリ縁ハアッテ。タエキリハセヌヿモアラウワサテ。四の句わが中をといふべきを。身をといへるは少しいかゞあり。身をに。川の水脈をかねたるをや

みつね

よしの川よしや人こうつらからめはやく云てしとハ忘れし

人ノ、ライハ□ニハテゼヒガナイ。人コソツラカラウタレ。オレハヤヘカタ云テオイタヿハイツマデモワスレマイト思フ。　はやくは。吉野川の縁あり。

花ぞめハつを草をもてろむるなり六帖にハ即ち月卿とあり

世の中の人の心ハ花ぞめのうつろひやすき色にぞ有ける

世ノ中ノ人ノ心ト云フモノハテウド花染ノ色デ。カハリヤスイ物デッコザルワイ

よみ人しらず

うたてハさまなるこゝろなりうつろふハかハるなり

心こうろうたてにくけれ染ざらバうつろふをもをしからましや

ウタテヤ。人ヲ思フコヲノ心ガ。ニクイヤッデヤワイ。コヲカラ思ハズハ。サキノ心ノカハルモ惜カラウカイ。人ノ心ノカハルガツライモ。コヲカラ思フユエデヤワイ。色とは。いはざれども。三四の句は色につきていへる詞なり。

世の中の人といへと人ひとりを指すなり

こまち

色見えでうつろふものハ世の中の人の心の花にぞ有ける

世をうきといふをうぐひすにかけてなくとハ云へり

る

草ヤ木ノ花ハ。色ガアルユエニウツロウヂヤガ。色ハアルトモ見エズニウツリカハルモノハ。世ノ中ノ人ノハナ〳〵シイ心ノ花デゴザリマスワイ。色見えでは。色のあきをいふあり。餘村初二句の注わろし

よみ人しらず

我のみや世をうぐひすと鳴わびん人の心の花とちりなん

○花ノチツテ。シマウタヨウニツレツウ人ノ心ガカハツテノイテ。シマウダナラバ。ウイコヤ。ツライコヤト思フテ。相手ナシニワシヒトリ。寂ノナクヤウニ泣テ居ルデアラウカ。世ハ男女の間をいふや。打聞下句を人の心の花とともにちりぬればとあるはわろし。花とは花のごとくにといはんが如し。寂とのゝおなじ○千秋云。なきわびんの譯に。泣てゐルテ。アラウカニあるハ。わびといふ詞の譯たらざるかとくなれども。是ハ上にツライコトヤト思フテとあり。是にあたれり。此たぐひなほおほし心をつくべし。

ある人公女の歌と見えてあハれにやさしく侍る故下の句ハ二人見たりし時をおもひいでゝやまのぱんとハいふなり

おもふともかれなん人をいかゞせんあかずちりぬる花とこそみつ

うせい法師

○イカホド殘念ニ思フタト云テモ。心ガカワツテ。トホノイテユク人テバナントセウゾ。トウモセウフガナイ。スレヤマダ見タチメウチニ早ウ散タ花ヂヤトヤ思フテ居ヤウマデ

今いとて君がかれなゞ我宿の花をゞひとり見てや思はん

よみ人しらず

○モウコレギリト思ウテ。君ガトホノイテ來ヌヤウニ。ナツタナラコチノ庭ノ花チバ。ワレヒトリガ見テ。君ノコヲイロ〳〵ト思ヒダスデアラウカ

むねゆきの朝臣

小町墓にわすれ草わか身につまんとおもひしハの心におふるなりけり

忘草かれもやするとつれもなき人の心に霜ハれかなむ

○人ノワレヲ忘レタ。ワスレ草モ枯テ。モシ又モトノヤウニ思フテクレルヨイニト思ハレル。霜デハソウタイ草ガ枯レルモノナレバ。ソノツレナウスレタ忘草ノカレルヤウニナ

寛平ノ御時御屏風に歌かゝせ給ひける時よみてかうせいほうし

わすれ草何をかたねと思ひしハつれなき人の心なりけり

○ワスレ草ト云フ物ハ何ヲタネニシテ。ハエルコトカト思フタガ。ソノタネハ人ノ心ヲヤウイノ。ハテツレナイ人ノ心ガラシテ人ヲバ忘レルモノヲヤウナ

題しらず

いとなきハいとまなきなるをいとなかると云にかけていへり後撰春の池の玉藻にあそふにほ鳥のあしのいとなき戀もする哉

秋の田のいねてふをもかけなくに何をうしとか人のかるらん

○㊀ワシガキラウテモウイヲト云詞ヲカケタフモナイニ。人ノ此ヤウニ遠ノイテ來ヌハ。何ヲウイト思フテノフヤラ。かけ。かる。皆稲の縁の詞なり

初雁の鳴ころ渡れよの中の人のこゝろの秋しうけれバ

きのつらゆき

○人ノ心ノ秋ガウイユエニ。ワシハ空ヲワタル初雁ノヤウニ泣テヤタテルワイ

あはれともうしとも物を思ふときなどか涙のいとなかるらん

よみ人しらず

○物ヲアハレト思フ時ニウイト思フトキモ。トカク涙ガホロ〳〵ホロ〳〵

日ぐらしのこゑもいとなく聞ゆるハ秋くれがたになれるなりけり

六帖にハ別に題にいだせれバその世にハ人のきりたる物なるべし且歌に藻にすむ虫の名をわすれつゝとよめるハ貝などの一名てわれからハ破殼の事とも思ハるなりいせものがたりにもわれから身をもくだきつる哉とよめり

ある注に桓武天皇の孫基世王の女なりといへり此王仁和五年正月任因幡守云々又ある説に因幡僧守といへり伊勢守綱陰が女にて伊勢とよぶにおなじ

ホロ〳〵ホロ〳〵トコボレル。ナゼニ此ヤウニ涙ガイソガシウ。コボレルコヤラ

餘材打聞ともに。くだ〳〵しき注あり

身をうしとおもふにきえぬ物ならバかくてもへぬる世にこそ有けれ

○キツウ身ヲウイト思フニハ命モ消ニサウニ思ハレルケレド。ソレデモサスガニキエハセヌモノヂヤ。スレバ此ノヤウニウイ身デモ。ヤッパリソレナリニタッテユク世デサゴザルワイノ

典侍藤原の直子の朝臣

あまのかる藻にすむ虫の我からとねをこそなかめ世をバ恨みし

○海士ノ刈ル藻ニ中ニワレカラト云虫ガ住デ居ルモノデヤト云フデヤガソノ虫ノ名ノトホリニ何事モワレカラデヤ。我身カラノコトデヤドレウケンシテコソ。泣ノナラ泣キモセウフナレ。ソレソウ人ヲバ恨ミマイゾヨウ思ヒマハシテ見レバ人ヲウラミルノハ大キナフカッデヤ

千秋云。われからの事。已レつら〳〵思ふに。もしハ虫の名にはあらで。たゞ藻にすむ虫のごと〳〵。はかなく数にもあらぬ我身から。といへるにはあらじか。又海人といひて。我からといへる詞は。仁徳紀に。あまなれやおのがものからねなくとあるをも思ひて。よまれたるにやあらん。

あひ見ぬもうきも我身のから衣思ひ乱らずもとくるひも哉

いなば

○逢タイ人ニアハレヌノモ。其ノ人ノツライノモ。ミンナ我身カラノコヂヤスレヤ。ドレホド思フタトテ。アハレルコデハナイニ。此ノヤウニ下紐ノトケルハサテモ〳〵マア。ガテンノワルイ下紐カナ。下ひものとくるは。人にあふべきしるしなり。

寛平の御時きさいの宮の歌合の歌

すがの〳〵たゞおん

涙かハなみだかなり

六帖に三の句やみなましかバ

つれなきを今ハ戀じとおもへども心よわくもおつるなみだか

○ツレナイ人ヲ。今ハモウ戀シウ思フマヒゾト。タシナムケレドモ。ナントソスルト思ヒダシテ。涙ガコボレル。サテモ〳〵マア心ヨワイコカナ

伊勢

題しらず

人しれずたになましかバわびつゝもなき名ぞとだにいはましものを

○シヾウ世間ヘシレズニ絶タ中デアラウナラ。絶ルハツライコナガラモ無イコヂヤト云テ。セメテハウキ名ノタヽヌヤウニナリにセウモノヲワシガ中ハ。ハヤ世間ノ人モ知テ居レバ無イコヂヤトモイハレヲバ絶タバカリカ。ウキ名サヘ立ッテサテモ〳〵メイワクナッライコカナ

○千秋云。すべてましものをとゞめる歌ハ。此詞のごとく多く意をふくめたるものなり心をつくべし

よみ人しらず

見きとないひろハ見けりとないひそなりきかくハさくをのべたる詞なり

もハらハ專の字の義なり

うれをだに思ふととて我やどを見きとないひろ人のきかくに

○人ヲ深ウ思フトキニハ其ノ人ノ家ナリトにも見タイヤウニ思ヒモノデヤガサウッチ〳〵思フテ居ルコトテヒヨットシタ詞ノハシニモ。ワシガ所。見タト云コモ。人ノ聞クトコロデ必ズ云テハナイヂヤ。エテハソンナコカラシレルモノデヤ。この歌ハ。こゝに入べき歌にあらず。しかるを餘材は。部立にあづみて。歌の意にたがへり。この集あらんからにはし〳〵おなじか部立のあやまりもあからん。

あふをのもはら絶ぬる時にころ人の戀しきことも忘りけれ

○自由ニアハレル時ニハ。戀シイト云ハドノヤウナモノヤラシラナンダニ。今カラスキト絶テアハレヌ時節ニナッテハジメテ人ノ戀シイコモ知ッタワイ

わびはつる時さへ物のかなしきハいづこを忍ぶ涙なるらん

此歌後撰には男の忘れ侍りけれバ伊勢が歌とせりかつ我の集にも見ゆ

○此ノヤウニ戀ニアグミハテタ時節ニサヘ。アノ人ヲヤッハリイトシイ。戀シイト思ウテ涙ノコボレルハ。ドコガ戀シウテノヿヤラ。此ノヤウニウイツライメニアハスル人ナレバ。イトシイヿモナイハズヂヤニ此かなしきいとほしく思ふ意也。さて三句何と。しのぶ涙といへる詞とをたがひに相まして心得べし。打聞に。忍びにあまだのかつらんとあるに。たがへり。

藤原おきかぜ

恨みてもなきてもいはんかたぞなき鏡にみゆる影ならずして

○ウランデモ泣テモ。此カナシミヲノ[illegible]ハ手ニ[illegible]テ。[illegible]ハモハヤ絶テ一向ニアウヿモナケレバ。鏡ヘウツルオレガ影デナウテハ外ニ相手ニシテ。云ウヤウハナイ

よみ人しらず

夕されば人なきとこを打はらひ嘆かんためとなれるわが身か

清濁

○ユウガタニナレバ。君ガキテ寐モセヌ床ヲハラウテ。獨リヲルトテハ。イツノ夜デモ〳〵。ツライヿヤト思フテ。タメイキヲツイテ寐ルヂヤガウシハマア此ヤウニツライ歎キヲセウタメニ。生レテ。キタ身カヤ。サテモ〳〵イングワナ身カナ

清濁

わたつみの我身こす波立かへりあまのすむてふうら見つるかな

○サッハリ絶ニテシマウタ中ヂヤノニ。ソノ人ノ心ノカハッタヿヲ。又ヒッカヘシテ。此ヤウニ恨メシウ思フヿワイノ。今サラ恨ンダトテ。ナンノセンガアラウヅサテモグチナワシガ心ガナ

万葉にあすよりはわが玉床をかはらひ君とはねずてひとりねんかも

小田はたび〳〵すきかへし作るなりはしめにすゝをバあらすきとてあら〳〵とすくなり

あら小田をあらすきかへしかへしても人の心を見てこうやまめ

○アラ田ヲ何ンベンモ〳〵スキカヘスヤウニマア何ンベンモ人ノ心ヲトツクリトヨウカンガヘテ見テコソ。モウラチガアカヌト云フハ定メウフナレ

後撰にときにはとたのめしとはまつほとの久しかるべき名にこそありけれ

ありう海の濱の眞砂と頼めしハ忘るゝとの數にぞ有ける

○濱ノ眞砂ノ數ハヨミツクスト云テモ。我戀ハヨンデモ〳〵ツキマイナドヽギヤウサンニ云ッテ。ワシチヨロコバシテオイテ。アノ濱ノマサゴノ數ハ。ミヅクサイフノケシカラヌタトヘデサ。アッタワイ

あしべより雲ゐをさしてゆく雁のいやとほざかる我身悲しも

○芦原カラ空ヲサシテヅヽトトンデユク雁ノダン〳〵ト遠ウナルヤウニダン〳〵ト思フ人ノトホノイテユクワシガ身ハマア。カナシイコトギヤ

ある説に秋風を人のあゝにそへたり

むなしくは死をいふにあらず我身かひなくといはんが如くそ

ちぐれつゝもみづるよりも言のはの心の秋にあふぞわびしき

○時雨ガフリ〳〵シテ木葉ノ色ノカハッテユク秋ノコロハッライモノギヤガソレヨリハ。云テオイタ詞ノカハル。人ノ心ノ秋ニヤウ身ガナホッライ

秋風のふきと吹ぬるむさし野ハなべて草葉の色かはりけり

○秋風ガフキサヘスレバ。アノ廣イ武藏野デモ。野ハサッパリミナ草ノ色ガカワッテ枯ルワイ。人ノ心モソノトホリサ。餘材〳〵だくだし

小町

秋風にあふたのみころかなしけれ我身むなしくなりぬ

れは田の子のなきよりむなしくといひたのめしとのわが身にむなしくなりたるとなり

よろゴの草の中に眞葛はとに風にうらがへるものなりよてくずの葉のかへるともうち見ともよむなり

と思へば

○秋ノ大風ニアフ稻ハ。キノドクナモノヂヤ。百姓ノ頼ミニシテ居ル田ガサツハリシマヒニナルワシガ中モテウドソンナモノデ。人ノ秋風ガフイテ頼ミニ思フタコトガ。皆ムダニナツタト思ヘバヤ。カナシイワイノたのみは。田の實によせたり。さて四の句。わが身むなしくと。つゞけてハ心得べからず。我身ハ秋風にあふといふへ捨りむなしくハたのみへかゝれり。

たひらのさだぶん

秋風のふきうらがへすくずの葉の恨みてもなほうらめしき哉

○上ウラミヲ云テモ〳〵。マタヤツパリ恨ガハレヌ。サテモ〳〵ウラメシイコカナ

よみ人しらず

空治橋の中絶たるとは古紀によんところなし

秋といへばよろにぞ聞しあだ人の我をふるせる名にこそ有けれ

○秋ト云コトバヨソノコノヤウニヤ思フテ居タカ。ヨソノコデハナイ。ウツリギナ人ノワシヲ見捨タノガ。ワシヲアキト云モノデ。ソノ名デヤゴザルワイノ

わすらるゝ身をうぢ橋の中絶て人もかよはぬとしぞへにける

○テウド橋ノ中ガキレテアレバ渡ル人モナイヤウニ。思フ人ニ忘レラレタ身ハウイモノデ。何ン年カモウチカラ。使モコヌワイ。千秋云。四の句人もかよはずしてと。見れはやすくきこゆ。又ハこゝあたかあたに人もかよはす

坂上これのり

あふをながらの橋のながらへてこひわたるまに年ぞへにける

ならんといよ詞万葉に秋の田の此はむけのよれる片よりに君によりなくこちたかりとも此よりなはようを延たる詞なり今のなりないんも成なんといふなり

○逢コモナイニ。ヤッパリアヒカハラズ。戀シタウテ月日ヲオクルウチニヤハヤ何ン年カタツタワイ。又ハアヒタイ〳〵ト思フテ戀シタウテ月日ヲオクルウチニヤ。千秋云後の譯の意なれバ。あふとを戀わたるとつゞきて。あふとなゝといひかけたるに。あらず。をもむによれバ さやうにも聞ゆるなり。

うきながらけぬる沫ともなりならん流れてとたに頼さ、れぬ身は

ともの り

○四ゼメテハ又末デナリモト思フ頼ミサヘナイワシガヤウナウイ身ハ。イツソノコ水ニウキニナガラ。消ル沫ノヤウニキエテシマイナリモスレバヨイ。千秋云。うきながらハ。下又きき、にての意にかねたるなるべし。

流てハいもせのやまの中におつるよし野の川のよしや世の中

よみ人しらず

○紀ノ國ノ妹山トセ山トノ間ダサヘ。吉野川ガ流レテ。來テ中ノヘダテガアルカラハ。ソウタイ人間ノ男女ノ中モ。イツマデモ始メノヤウニムツマシウハナイハズノコデ。久シウナレバオノヅカラカレコレガ出來テクルノモ。ソノハズノコヂヤ。ハテゼヒガナイ山デサヘサウヂヤモノ。世の中は。男女の中をいべるあり。すべて男女のあからひを世ともいへると多し心得おくべし。

頭書 古今和歌集遠鏡卷之十五終

あいとやうのうたこゝの詞にハかなしびうたととなふべし

拾遺にみつせ川わたるみさをもなかりけり何にころもをぬきてかゝらん

頭書 古今和歌集遠鏡卷第十六

哀傷歌

いもうとの身まかりける時よめる　小野たかむらの朝臣

なく涙(なみた)あめとふらなん渡(わた)り河(濁)水まさりなゞゝへりくるがゝ

○雨ガフッタナラ三瀬川(ミセウガワ)ノ水ガマスデアラウ。ソシタラ。妹ガヨウ渡ラズニ又此ノ世ヘモドッテクルコモアラウソノタメニ。此ノオレガ泣涙(ナクルイダ)ガ。ドウゾ雨(あめ)ノトホリニフレバヨイ

さきのおほきおほいまうちぎみを白川のあたりに送葬(おくり)ける夜よめる　そせい法師

ほりかハのおほきおほいまうち君は關白太政大臣基經卿なり

うつせみとハいにしへの詞にハ現身の事にてうつしみうつそみなどもいひて蟬のからのことにいひしハなしやゝ後比よりもぬけがらのことにいへり

ちの涙（濁句）おちてぞたぎつ志ら川ハ君がよまでの名にこそ有けれ

○此川ノ名ヲ白川ト云。此度オカクレナサレタ良房公（四）樣ノ御在世ギリノサ名デアッタワイ。此ノ殿ノ御カクレナサレタレバ。悲シサニ拙僧ガ泣ク。此ノ眞赤（三）イナ血ノ涙（二）ガサッサト流レル。スレヤモウ白川デハナイ赤川ヂヤ

ほりかハのおほきれほいまうち君身（清）まかりにける時にふかくさの山よをさめてける後よよみける

僧都勝延

うつ蟬ハからを見つゝもなぐさめつ深草の山けふりだにたて

○蟬ハカラヲヌキステゝオイテ。ドコヘカインデシマウモノヂヤガ。ソレ

モソノヌケガラハ。イツマデモ殘ツテアルニ。人ハ死ヌルトソノマヽ。ヌケガラサヘ燒テシマウテ。跡ヘ殘シテハオカヌモノデ。此ノ基經公樣モ御尊骸サヘノコラヌハ。サテ〳〵オノコリオホイフギヤ。セメテソノ御火葬ノ烟ナリモ殘ツテアレ。此ノ深草ノ山ヨ。ソシタラ。ソレヲ見テナリモ。御尊骸ノナゴリギヤト思フテ。少シハカナシサヲハラサウニ。なぐさめつといふと。蟬の方にいひたれども。意ハ蟬にハかゝらず。蟬にはかゝらを見てなぐさむる事よしなし。この詞ハ烟だにたて。それを見てなぐさめんといふ意あるを。上にいひて。下へひゞかせたるものなり。古歌にはかゝるとおほし。さる例をしらでハまぞふとあり。心得かくべし。

公の薨じ給ふハ正月なれども嗣事に深草山に納てける後ニとあれバ二月の末などに花のさきたるを見てよめるなるべし

深草の野べの櫻しこゝろあらばことしばかりは墨染にさけ

かむつけのみねを

拾芥抄に延喜七年卒すと見えたり
後撰に敏行の逢坂のゆふがけに明烏のとよめるハ此度のことにや
今の水に雖でも見てけりとあれど類聚抄ならびに六帖にも見えけりとあるをよしとす

○此ノ度基經公ヲヲサメマシタ此ノ深草ノ野ノ櫻ガマアルナラ。今年バカリハ墨染ノ色ニサケサ。人モミナ墨染ノ服ヲキテ居春ヂヤニ

藤原ノ敏行ノ朝臣の身をかりける時によみてかの家につかはしける

きのとものり

ねても見ゆねでも見にけり大かたハ空蟬のよぞ夢よハありける

○此ノ度ノソコモトノ御不幸ニツイテ。ヨウ思フテ見マスレバ夢ト云モノハヲヽムツテ居テモ見ルモノナリ。又寐イデモ見ルモノデゴザルワイ。此ノ人間ノ世ガヲ。ソウタイミナ夢デゴザルワイスレヤ。寐デモ見ルヂヤワヲ。アヽ敏行殿ノ御事マコトニ夢ノヤウニ存シマス

あひ去れりける人のみまゐりにけれバよめる

きのつらゆき

今の木に世の中にとあるハわろし六帖に世の中をとあるをよしとすこの歌拾遺にふたゝび入られたり

この歌家集にハ相知りたる人のすまひの使に遣き國へくだるにとありて事たがへり

夢とてういふべかりけれ世の中ようつゝある物と思ひける哉

○世ノ中ヲパソウタイ皆夢トヲ。云ハウフザヤウイ。ソレニ今マデハ。正眞ノコトガアルモノザヤト思フテ居タハ。サテモアハウナフカナ

あひ知れりける人の身まかりよける時によめる

みぶのたゞみね

ぬるがうちに見るをのみやハ夢といはんはかなき世を現とハ見ず

○チムッテ居ルウチニ見ル夢バカリヲ。夢ト云ハウフカイ。ソレバカリデハナイソウタイ此ノ無常ナヨノ中モ正眞ノフトハ思ハヌ。ミナ夢ザヤ

あねのみまかりよける時よめる

瀬をせけば淵となりてもよどみけり別れをとむる志がらみぞなき

○川ノ瀬ナシガラミテセキトメレバ。流レテユク水デモ淵ニナッテトマルモノヂヤワイ。ソレニ死ンデユク人ヲセキトメルシガラミハナイ

藤原たゞふさが昔あひ思りて侍ける人のみまりにける時にとぶらひにつかはすとてよめる　閑院

さきだゝぬくいのやち度かなしきは流るゝ水のゝ〳〵りこぬなり

○人ノ死ヌレバテウド流レテユク川ノ水ノトホリデ。二タビ返ッテクルトシモ御同前ニカヲ落シマシタ。サキヘ早ウ死ニマシタラヨカッタニカウシテ生テヰリマスノガ悔シウテ。クリカヘシ〳〵カナシイハ此ノ度ノ御事デゴザリマス。サキヘ死ニマシタナラ。コンナコトハウケタマハルマイモノ。餘材打聞ともにたしかならず。三の句のはもじと。結句万葉の長歌に行水のかへらめごと〳〵吹風の見えぬがごと〳〵あともなきよの人にて（下略）

のありとを。相照して味ふべし。さて二の句。くいのとゝばらく切て。八千度かおしきへとつゞけて讀べし。八千度は。かおしきへかゝれり。悔にかゝれる詞にはあらず

家集六帖等にハ二の句令なれどもとありて末の句家集にあハれなりけれとあり

紀友利が身まかりにける時によめる　つらゆき

あす志らぬ我身と思へどくれぬまのけふハ人こそかなしかりけれ

○我身も明日ハシレヌトハ思ヘドマダ暮テ。明日ニナラヌ今日ノウチハ。マアオレハカウシテ殘ッテ居レバ。人ノ死マダノガ悲シイワイ

時しもの しもハ必しもなどの例にて助詞なり

たゞみね

時しもあれ秋やは人のわかるべきあるを見るだに戀しき物を

○時節モアラウニ秋ノ時分ニ人ノ死ナウコカヤ。秋ハモノカナシイ時節

父母の喪ハおもひといへり

藤衣とハ喪服をいふ端をぬハぬもの故日來ある中に糸のはつるゝなり

ナレバ生テアルヲ見テサヘナツカシウ思レルニマア

はゝが思ひにてよめる　凡河内ノみつね

かみな月しぐれにぬるゝもみぢ葉ハたゞわび人の袂なりけり

○此ノ十月ノ時雨ニヌレタ紅葉ヲ見レバ。トント悲シイフノアル者ノ袖ヂヤワイ。今度毋様ニハナレテカナシサニ。血ノ涙ヲ流シテヌレル我ガ袖トアノ紅葉ト。色モヌレタヤウスモ。トツトオンナジフヂヤ

ちゝがおもひにてよめる　たゞみね

藤衣はつるゝ糸ハわび人の涙のたまのをとぞなりける

○ワシガ今服テ着テ居ルキルモ〳〵ハツレテ來ル糸ハ。涙ノ玉ヲツナグ緒ニナルワイ。涙ノテウド玉ノヤウニコボレルガハツレタ糸ヘカヽルハ。玉ヲ緒ヘツナグヤウニ見エテサ

おもひに侍りけるとしの秋山でらへまかりける

打間つるかなに作れりつる哉とハ過しとなれバなりさて朝露のおくとつゞけ山田をかるゝと云と序ながらも道のゆくてのけしきをもてよめり

墨ぞめのたもとハ藤衣なり

道よてよめる　つらゆき

朝露のおくての山田かりそめようきよの中をおもひぬるかな

○目今デハ。世ノ中ノウイモノヂヤト云フヲ。タヾウカ〳〵トカリソメニ思フテ居タフカナ。今度不幸ニアウテ世ノ中ノウイコトヲ眞實ニ思ヒシツタ

おもひに侍りける人をとふらひにまかりてよめる　たゞみね

墨染の君がたもとハ雲なれやたえず涙の雨とのみふる

○貴樣ノキテゴザル服ノソノ袖ハ雲ヂヤカシテ。涙ガタエズヒタモノ雨ノヤウニフリマス

妻の親の忌中で此よみ人がめのおやのおもひにて山寺に侍けるをある人のとふらひつかはせりけれゞ返りごとによめる